



広島県三次市文化財調査報告書 第16集

寄貞第7・8号古墳発掘調査報告書

2023年

三次市教育委員会
特定非営利活動法人 広島文化財センター

例 言

- 1 本報告書は、昭和 55（1980）年度に実施した広域営農団地農道整備事業備北地区第 4 工区工事にかかる寄貞第 7・8 号古墳の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、寄貞古墳発掘調査団が広島県三次農林事務所から委託を受けて次のとおり実施した。

遺 跡 名：寄貞第 7・8 号古墳，寄貞城跡

所 在 地：広島県三次市西酒屋町字大久保

発掘調査期間：昭和 55（1980）年 4 月 7 日から 4 月 26 日

発掘調査担当：寄貞古墳発掘調査団

団 長 三浦 亮（三次市文化財保護委員会委員長）

副 団 長 林 利春（三次市教育委員会教育長）

事 務 局 伊藤正壯（三次市教育委員会社会教育課長）

調 査 員 中村芳昭（三次市教育委員会社会教育課主事）

調査補助員 平林 工

※昭和 55 年度当時

- 3 整理作業・報告書作成については、基礎的な整理は友廣美和が行い、執筆は中村芳昭、友廣美和、桑原隆博が行い、遺物実測、遺物写真撮影、遺構・遺物トレース、図版作成、編集等の整理作業・報告書作成業務は、三次市教育委員会との委託契約により、特定非営利活動法人広島文化財センターが三次市教育委員会の指示・監理のもとで実施した。
- 4 挿図の遺物番号と図版の遺物番号は同一である。
- 5 本報告書に使用した方位は磁北である。
- 6 本報告書に掲載した、第 1 図は国土交通省国土地理院発行の 25,000 分の 1 の地形図（三次）、第 2 図は三次市都市計画図 2,500 分の 1，それぞれの一部を使用した。
- 7 発掘調査及び報告書の作成に当たり、次の方々・機関より御指導・御教示をいただいた。記して謝意を表します。

沖田健太郎、加藤光臣、上重武和、島田朋之、濱岡大輔、平林工、脇坂光彦、広島県三次農林事務所（現広島県北部農林水産事務所）、広島県教育委員会文化課（現文化財課）、広島県立歴史民俗資料館、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（現公益財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室）、三次市文化財保護委員会

- 8 発掘調査の記録類及び出土品は、三次市教育委員会において保管している。

目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
III	調査の概要	6
IV	遺構と遺物	
1	寄貞第7号古墳	10
2	寄貞第8号古墳	16
3	寄貞城跡	26
V	まとめ	27

挿 図 目 次

第1図	周辺主要遺跡分布図 (1:25,000)	3
第2図	遺跡周辺地形図 (1:5,000)	7
第3図	遺跡周辺地形図 (1:1,000)	8
第4図	第7号古墳調査前地形測量図 (1:200)	9
第5図	第7号古墳墳丘測量図 (1:100)	10
第6図	第7号古墳墳丘土層断面図 (1:60)	11
第7図	第7号古墳主体部実測図 (1:40)	12
第8図	第7号古墳出土遺物実測図 (1)(1:4)	13
第9図	第7号古墳出土遺物実測図 (2)(1:4)	14
第10図	第8号古墳調査前地形測量図 (1:150)	17
第11図	第8号古墳墳丘測量図 (1:100)	18
第12図	第8号古墳墳丘土層断面図 (1:60)	19
第13図	第8号古墳第1主体部実測図 (1:40)	20
第14図	第8号古墳第2主体部実測図 (1:40)	21
第15図	第8号古墳出土遺物実測図 (1)(1:3, 1:2)	22
第16図	第8号古墳出土遺物実測図 (2)(1:2, 1:3)	23
第17図	寄貞城跡地形測量図 (1:200)	26

表 目 次

第1表	第7号古墳出土遺物一覧(埴輪)	15・16
第2表	第8号古墳出土遺物一覧(土器)	24
第3表	第8号古墳出土遺物一覧(鉄製品-鉄鏃-)	24
第4表	第8号古墳出土遺物一覧(鉄製品-馬具-)	25
第5表	第8号古墳出土遺物一覧(鉄製品-刀子-)	25
第6表	第8号古墳出土遺物一覧(鉄製品-その他-)	25
第7表	三次市内の発掘調査された葺石をもつ古墳	30
第8表	三次市内の埴輪出土の古墳	31
第9表	三次市内の馬具出土の古墳	31

図 版 目 次

寄貞第7号古墳

- 図版1 1. 第7号古墳全景(北から)
2. 第7号古墳全景(東から)
3. 第7号古墳検出状況(東から)
- 図版2 1. 第7号古墳東側土層(東から)
2. 第7号古墳西側土層(東から)
3. 第7号古墳西側土層(西から)
- 図版3 1. 第7号古墳主体部
2. 第7号古墳完掘状況(東から)
3. 第7号古墳完掘状況(北から)

寄貞第8号古墳

- 図版4 1. 第8号古墳全景(北から)
2. 第8号古墳全景(南から)
3. 第8号古墳甕・鉄鏃鏃先出土状況(西から)
- 図版5 1. 第8号古墳南側土層(西から)
2. 第8号古墳西側土層(南から)
3. 第8号古墳第1主体部検出状況(北から)
- 図版6 1. 第8号古墳第1主体部検出状況(西から)
2. 第8号古墳第1主体部検出状況(北から)
3. 第8号古墳第2主体部検出状況(北から)

- 図版7 1. 第8号古墳第2主体部検出状況（北から）
2. 第8号古墳第1・第2主体部検出状況（東から）
3. 第8号古墳第1主体部鉄器出土状況（北から）
- 図版8 1. 第8号古墳第1主体部鉄器出土状況（南から）
2. 第8号古墳第1・第2主体部完掘状況（東から）
3. 寄貞古墳群現況（南から）

寄貞城跡

- 図版9 1. 寄貞城跡現況 遠景（東から）
2. 寄貞城跡現況 土塁（西から）
3. 寄貞城跡現況 土塁（南から）
- 図版10 第7号古墳出土遺物1
- 図版11 第7号古墳出土遺物2
- 図版12 第8号古墳出土遺物1
- 図版13 第8号古墳出土遺物2

I はじめに

寄貞第7・8号古墳及び寄貞城跡は、備北地区広域営農団地農道整備事業第4工区工事(以下、「備北農道」という。)に伴い発掘調査を実施した。

昭和54(1979)年12月27日付けで広島県三次農林事務所(以下、「三次農林」という。)から三次市教育委員会(以下、「市教委」という。)に三次市西酒屋町で開発予定の備北農道にかかる文化財等の有無及び取扱いについての協議があった。これを受けて現地踏査を行い、昭和55(1980)年2月12日付けで三次農林へ寄貞第7・8号古墳及び寄貞城跡が存在するためこの取扱いについて協議する旨の回答を行った。この取扱いについて協議したところ、三次農林は設計変更等による古墳の現状保存は困難であり、発掘調査を行い記録保存とすることとなった。三次農林は文化庁長官宛へ同年2月27日付けで文化財保護法(以下、「法」という。)第57条の3(現法第93条)に基づき埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の実施について通知した。そうした中で、同年3月14日に広島県教育委員会(以下、「県教委」という。)から市教委に工事に当たって古墳の破壊が予想される旨の連絡があり、同日、三次農林(備北農道建設事業所)と県教委・市教委が現地で立会い、古墳の範囲を指示し、範囲内で工事を行わないよう申し入れた。その後、同年3月18日に三次農林(備北農道建設事業所)より工事施工者との工事中止指示の不徹底により古墳の一部が破壊された旨の連絡があり、再度古墳の範囲を示してもらいたいと市教委に連絡があった。このため、市教委は改めて古墳の範囲を示し、二度とこのようなことがないよう要請した。この際に第7号古墳は約半分、第8号古墳は墳丘の一部(幅約2m)が破壊されていた。

古墳の取扱いについての協議をする一方で、市教委は寄貞古墳発掘調査団を組織し、文化庁長官宛に昭和55年4月1日付で法第57条第1項(現法第94条)に基づき埋蔵文化財の発掘調査の届出を行なうとともに、三次農林と4月1日付で委託契約を締結した。発掘調査は、昭和55年4月7日から4月26日まで実施した。

発掘調査にあたっては、広島県教育委員会の指導を得るとともに、広島県三次農林事務所(現広島県北部農林水産事務所)、三次市農政課、広島県立歴史民俗資料館、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター(現公益財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室)、各地権者や地元の方々から多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

II 位置と環境

三次市は、山陰と山陽のほぼ中間に位置し、古代から交通・文化の要衝地として陰陽を結ぶ内陸の中核都市として発展してきた。現在までに、旧石器時代から近世に到る各時代の遺跡が多数確認されている。特に、古墳は、4,000基近い数が存在し、広島県内の古墳の3分の1がこの三次地域に集中するという県内でも有数の遺跡密集地である。

寄貞古墳群が所在する酒屋地区は、三次市街地の南に広がる低丘陵地帯に在り、史跡矢谷古墳、広島県史跡酒屋高塚古墳や古代三次郡の郡衙跡と推定されている広島県史跡下本谷遺跡など多くの遺跡が存在する。

その中で寄貞古墳群は、中国自動車道三次インターチェンジから南西に約1.1 km、標高230 mの豪雨災害などの自然災害を受け難い位置に存在している。

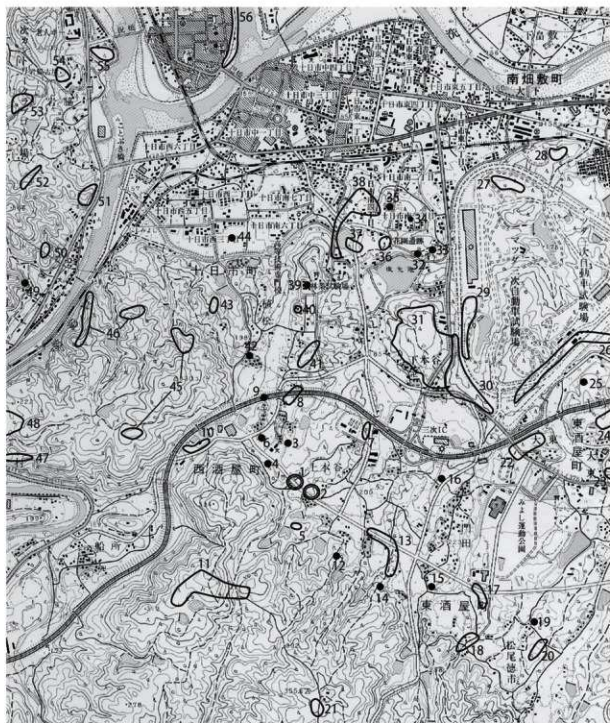
以下、旧三次市内の遺跡を概観してみる。

旧石器時代 この時代の遺跡として調査例は少ないが、馬洗川沿いに点在して石器出土地が確認されている。下本谷遺跡（西酒屋町）、段遺跡（四拾貫町）、和知白鳥遺跡（和知町）では、ナイフ形石器などが出土しており、これらは始良Tn火山灰（AT. 約2.8～3万年前）降灰に先行する時期のもので、後期旧石器時代初頭から中期旧石器時代に遡る可能性が指摘されている。その他、酒屋高塚古墳墳丘下（西酒屋町）、下山遺跡（四拾貫町）や松ヶ迫A地点遺跡（東酒屋町）で少数ではあるが石核・剥片などが出土している。

縄文時代 この時代の遺跡も確認例は少ない。規模も小規模で時期的に限られる。松ヶ迫B地点遺跡（東酒屋町）では、早期の小形の竪穴建物跡が検出され、楕円押型文土器・石器、下本谷遺跡で楕円押型文土器が出土したほか、重岡山遺跡（塩町）、宗祐池西遺跡（南畑敷町）がある。後期の遺跡では縄文土器や石斧が出土した元国遺跡（粟屋町）、晩期の遺跡では下の割遺跡（和知町）がある。また、松ヶ迫A地点遺跡、緑岩遺跡（東酒屋町）、松尾徳市遺跡（東酒屋町）では、動物狩猟用と考えられる土坑（落とし穴）が調査されている。

弥生時代 これまで確認されている前期や中期前半の遺跡は少なく、小規模なものであるが、中期後葉になると加飾性・特色ある器種・器形の地域性豊かな土器の塩町式土器が広がり、遺跡数も増加し大規模な遺跡も出現するが、後期の遺跡の確認は少ない。墳墓は、塩町式土器とあわせて四隅突出型墓が出現し、弥生末まで造られる。その他、前期から石で覆う墳墓がみられるとともに、中期には土坑墓、貼石墓が造られ、早くから石により標識・区画が行われている。集落跡としては、前期の高蜂遺跡（南畑敷町）では縄文時代晩期の突帯文土器と前期の遠賀川式土器が出土している。中期には、鍛冶作業の推定されている竪穴建物跡が調査された高平遺跡（十日市南）、岩脇遺跡（粟屋町）など、集落跡が増加するとともに、当該地域の中期後葉の標識土器である塩町式土器は地域色豊かで広域に広がっている。後期には、岡竹遺跡（十日市南）、井上佐渡守土居屋敷跡（敷敷町）で竪穴建物跡が調査されている。

墳墓としては、前期の配石墓である高平A号墓（十日市南）、埋葬施設（木棺・土坑）が12基検出された松ヶ迫矢谷遺跡（D地点）（東酒屋町）、中期の後葉には四隅突出型墓の宗祐池西1・2号墓（南畑敷町）や貼石方形墓の四拾貫小原遺跡（四拾貫町）など、後期には墳丘墓2基と溝



第1図 周辺主要遺跡分布図(1:25,000)

- 1.寄貞古墳群 2.寄貞城跡 3.大久保南古墳 4.寄貞西古墳 5.大原迫古墳群 6.末元城跡 7.三段田城跡 8.大久保古墳群・大久保D地点遺跡 9.大久保C地点遺跡 10.按湯古墳群 11.丸草田古墳群 12.大原迫南古墳群 13.大坂古墳群 14.大坂南古墳群 15.門田河面古墳群 16.門田遺跡 17.門田牧盛古墳群 18.大成古墳群 19.松尾徳市遺跡 20.松尾古墳群 21.鯉ヶ釜古墳群 22.天狗松南古墳群 23.松ヶ追C地点遺跡 24.松ヶ追E地点遺跡 25.松ヶ追第1号古墳 26.天狗松北古墳群 27.黄幡古墳群 28.黄幡東古墳群 29.善法寺古墳群 30.下本谷東遺跡 31.下本谷遺跡(県史跡) 32.日光寺遺跡(県史跡) 33.日光寺経塚群 34.岡竹大久保遺跡 35.岡竹遺跡 36.花園遺跡(史跡) 37.大樽池古墳群 38.花園古墳群・若宮古墳(県史跡) 39.高平A~C墳墓 40.高平遺跡・高平古墳群 41.大久保南古墳群 42.酒屋高塚古墳(県史跡) 43.沼山城跡 44.下原遺跡 45.桶松古墳群 46.下原古墳群 47.大村南古墳群 48.大村北古墳群 49.中村古墳 50.鍋屋谷古墳群 51.重広城跡 52.岩脇大久保古墳群・岩脇大久保遺跡 53.元岡古墳群 54.岩脇古墳(県史跡)・岩脇古墳群・岩脇墳墓群・岩脇遺跡 55.丸小山古墳群 56.旭堤(浅野堤)・旭堤下層遺跡

で区画された6つの墓域が調査された花園遺跡（史跡・十日市南）や、四隅突出型墓として吉備型の特徴器台・壺が出土した前方後方形をした矢谷MD1号墓（史跡「矢谷古墳」東酒屋町）、岩脇墳墓群（粟屋町）などがある。

古墳時代 前期の遺跡の確認は少ないが、中期になると増加し大規模なものが確認され、後期になると更に増加し、大規模になるとともに、丘陵斜面で多くの遺跡が確認されている。特に、中期には鉄生産に関わる遺跡が確認され、後期にはさらに増加する。古墳は全国的にも密集地域の一つで約4,000基の古墳が確認されており、丘陵状に多くの古墳が築造されている。前期の古墳は不明確な点もあるが次第に明らかになりつつある。中期には大型の古墳も出現するが、帆立貝形古墳を呈する。また、中・小規模の古墳も数多く築造され、群を形成し、後期前半まで続き、6世紀中頃には横穴式石室が造られ始め、後半以降は横穴式石室が構築される。

畿内系の土師器が出土した旭堤下層遺跡（三次町）があるが、当該期の遺跡は不明である。中期以降では集落跡の調査例が増加し、和知白鳥遺跡、三重1号遺跡（四拾貫町）、松ヶ迫A・B・F・G地点遺跡（東酒屋町）などがあり、大規模な集落跡が明らかになっている。この時期には鍛冶炉を伴うなど鉄生産に関わる遺構を伴うものが多くなる。須恵器の窯跡が調査された松ヶ迫窯跡群（東酒屋町）などがある。

前期の古墳は不明瞭であるが、前方後円墳の若宮古墳（墳長約38m、十日市南）、大型円墳（直径約30m）の岩脇古墳（粟屋町）などが遡る可能性がある。中期には、四拾貫第9号古墳（四拾貫町）、大樽池第5号古墳（十日市南）などの小型の古墳が多く築造されるとともに、帆立貝形古墳の酒屋高塚古墳（墳長約46m、西酒屋町）などの大型の古墳が築造される。また、四拾貫古墳群（約140基）（四拾貫町）などの古墳群（古式群集墳）が形成される。後期には久々原第6号古墳（西酒屋町）などの小型の前方後円墳や緑谷古墳（南畑敷町）、上四拾貫古墳群（四拾貫町）、大坂古墳群（西酒屋町？）などの竪穴系の埋葬施設の中・小型の古墳が引き続き築造されるとともに、横穴式石室が築造され始める。三次地域では6世紀前半頃の若屋第9号古墳（粟屋町）が最も古く、6世紀後半以降には粟屋高塚古墳（粟屋町）、四拾貫小原第16号古墳（四拾貫町）など横穴式石室の古墳が増加する。また、終末期の古墳として、柄香炉形土製品が出土した門田敦盛第4号古墳（東酒屋町）は7世紀中頃、和知白鳥第1～3号古墳（和知町）は7世紀後半と考えられており、幅の狭い小型の横穴式石室が築造される。

古代 三次地域は東半分が三谷郡、西半分が三次郡に分かれていた。下本谷遺跡（西酒屋町）では掘立柱建物跡・欄列がコの字状に配置されており、三次郡の郡衙跡と推定されている。また、9世紀前半の仏教説話集『日本霊異記』に記載の三谷寺に比定されている7世紀後半に創建された寺町廃寺跡（向江田町）を中心に軒丸瓦の下端に三角形の突起がつく特色のある軒丸瓦（水切り瓦）が出雲や吉備南部にも広がるが、この軒丸瓦をもつ寺戸廃寺跡（三次町）が7世紀末頃に創建された。

中世以降 中世になると、在地で頭角を現した三吉氏や江田氏などに関係する城跡が三次市内で50数か所確認されている。戦国期に在地の国人領主であった三吉氏は比叡尾山城跡を居城としたが、三吉氏最後の当主広高は16世紀末比叡尾山城跡へと移築している。その他、南の平野部には江田氏家臣祝氏が居た泉史跡高杉城跡（高杉町）が存在する。高杉城跡は知波夜比古神社境内を中心とする約70m四方で遺構が確認でき、周囲には幅約4～5m、深さ1mの堀が、ま

た高さ1～2m、幅3～4mの土塁が廻っており、部分的には石積みも見られる。1553（天文22）年に尼子と毛利の合戦が行われている。この合戦の中で、旗返山城（三若町）に本拠を置く江田氏は、大内・毛利方を離れて尼子方についたため、同年毛利元就によって滅ぼされた。その他、三吉豊後守及び長岡多左衛門が居た沼山城跡、三吉氏の家臣上里越後守守光が居た積山城（尾関山城）跡等がある。また、井上佐渡守土居屋敷跡では中世末期から江戸後期の掘立柱建物跡や土坑、掘跡、井戸遺構等が確認されている。岡竹遺跡ではコ字状に廻る溝状遺構が確認されており、館跡の可能性もある。

近世以降になると、馬洗川と西城川により形成された沖積地に立地する三次町・十日市町を中心に展開する。17世紀前半に三次藩の藩主となった浅野長治は、町を囲む川を天然の堀とみたくて町割り全体を城郭とする城下町を整備した。また、三次町を水害から守るために大規模な旭堤が築かれ、少なくとも4回以上の大改修が行われていることが明らかにされている。馬洗川・西城川兩岸を利用した自然堤防上に形成された「三次町」は現市街地の原型となる町人町へと発展する。

【参考文献】

広島県教育委員会『広島県遺跡地図X1（三次市・庄原市）』平成18年

広島県双三郡三次市史料総覧編修委員会『広島県双三郡三次市史料総覧』第5篇（広島県双三郡三次市史料総覧刊行会）昭和49年

広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第4集（1996（平成8）年）

三次市史編集委員会『三次市史Ⅰ（自然環境、原始古代通史、中世近世通史）』、『三次市史Ⅱ（遺跡・山城、古代中世文獻、木簡・棟札等、近世文獻資料）』（三次市）平成16年

※各遺跡にかかる報告書は省略した。

Ⅲ 調査の概要

寄貞古墳群、寄貞城跡は、中国自動車道三次 I . C . から南西に直線で約 1.1 km の三次市西酒屋町字大久保 564- 5 ほか 4 筆に所在する。

寄貞古墳群、寄貞城跡は、三次市街地の南側に位置する。三次市街地の南側は、市街地の標高が約 150 m 余、その南側には標高 200 ～ 230 m の緩やかな丘陵が南から北に延びその間を小河川が流れ水田が広がっており、さらに南には標高 300 m 余りの山々が連なっている。本古墳群は標高 200 ～ 230 m の場所に位置し、南から北に向かって流れる小河川により小谷が幾筋か形成され、丘陵は分断されており、こうした低丘陵の一つの谷頭部に本古墳群は所在し、標高は約 230 m であり、三次市街地との比高は約 80 m である。本古墳群が立地する周辺には、酒屋高塚古墳をはじめ大久保古墳群、大坂古墳群などの古墳（群）が点在しているが、古墳群の規模は小規模であり、三次地域の古墳の特色である古墳が群集するという古墳群という状況ではない。

寄貞古墳群は『広島県双三郡三次市史料総覧』第 5 篇によると円墳 9 基からなる古墳群とされているが、昭和 54 年度の分布調査時には 8 基が確認され 1 基は不明とされている。古墳群は丘陵の頂部を中心に立地し、備北農道に伴う発掘調査の対象は、第 7 ・ 8 号古墳である。第 7 号古墳は丘陵頂部平坦部の南縁に立地するが、第 8 号古墳は第 7 号古墳から南に延びる丘陵尾根上に立地し、約 50 m 離れており、また、約 7 m 低い位置である。一方、寄貞城跡は寄貞古墳群から東に延びる丘陵が一段低くなった丘陵先端部に位置し、古墳群の所在する丘陵頂部から約 15 m 低い。寄貞城跡については斜面部が工事範囲内で郭等の遺構は工事範囲外であることから地形測量調査を行った。このため発掘調査の面積は古墳の存在する約 600m²である。

寄貞第 7 号古墳

本古墳は直径約 13 m の規模の円墳で、墳裾に葺石が廻るとともに東側に周溝が掘られている。埋葬施設は土坑である。

遺物としては、墳丘及び周溝から埴輪が出土している。

寄貞第 8 号古墳

本古墳は直径約 12 m の規模の円墳である。埋葬施設は小型の竪穴式石室と木棺を納めて周囲に礫を配した土坑の 2 基である。

遺物としては、土師器、須恵器、鉄製の馬具類・武器類・農工具類が出土している。

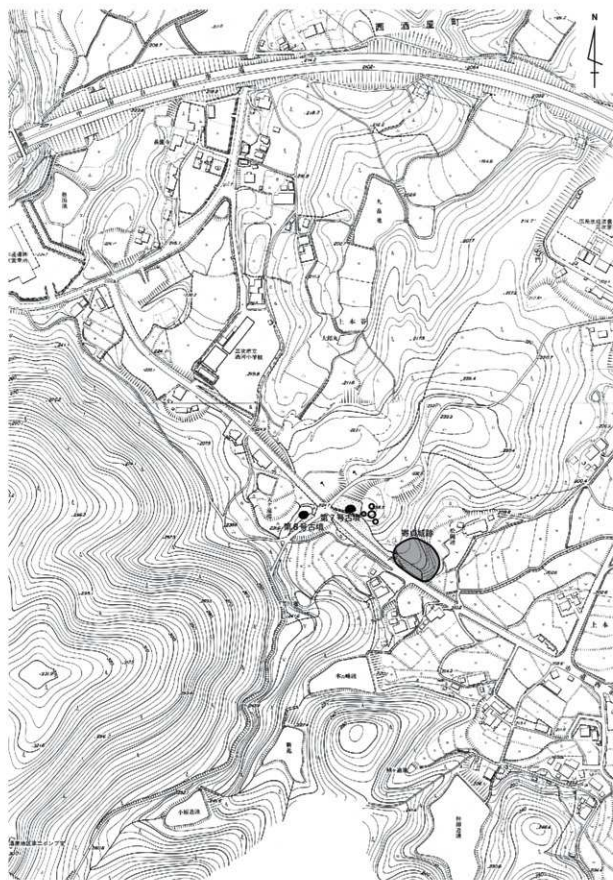
寄貞城跡

北西から南東に延びる小尾根の先端部を利用して、土塁と堀切によって画された主となる郭と小形の郭、帯郭からなる小型の城跡である。備北農道により主郭の西側斜面部が削平されるため地形測量を行った。

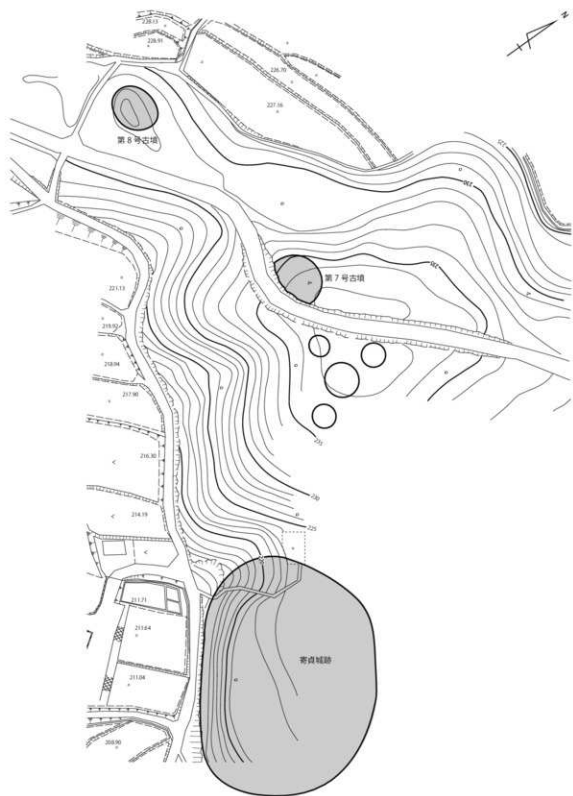
【参考文献】

広島県双三郡三次市史料総覧編修委員会『広島県双三郡三次市史料総覧』第 5 篇（広島県双三郡三次市史料総覧刊行会）昭和 49 年

広島県教育委員会『広島県遺跡地図 X I（三次市・庄原市）』平成 18 年



第2図 遺跡周辺地形図(1:5,000)



第3图 遺跡周辺地形図(1:1,000)

寄貞古墳群は9基の古墳となっているが、1基は不明となっている。なお、地形図に記載されている古墳群の位置は大きく違っており、備北農道で調査された第7・8号古墳も山林の丘陵部に記載されている。

なお、現在は古墳が4基確認できるのみである。

『芸藩通志』巻126・131

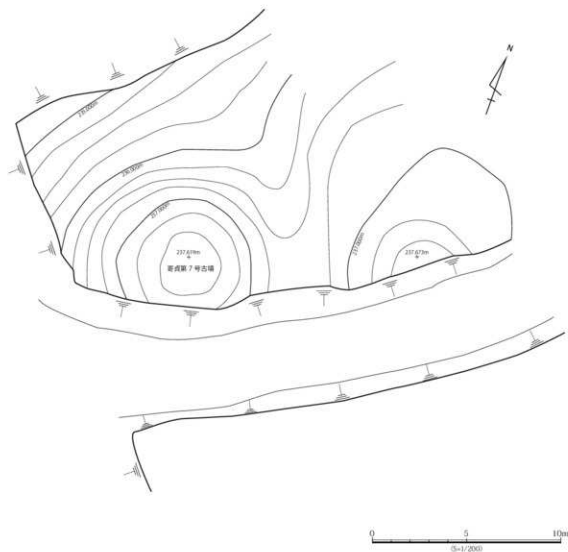
巻126の「西酒屋村」の絵図に「寄貞城」と記載されている。

巻131の「城墟宅址戦場附」のなかに「寄貞城 三段田城 沙脇城 並に西酒屋村にあり、皆堡塁の址なれど、守者を傳えず」と記載されている。

広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第4集 1996（平成8）年

西河村史編纂委員『西河村史資料集』昭和28年（ガリ版刷り）

「西酒屋 寄貞古墳群（7）1か所に7個かたまっている。」「西酒屋 寄貞城 寄貞にその跡がある。城主も不明、文献なく、土地の人が語るのみで詳細不明である。」と記載されている。



第4図 第7号古墳調査前地形測量図(1:200)

IV 遺構と遺物

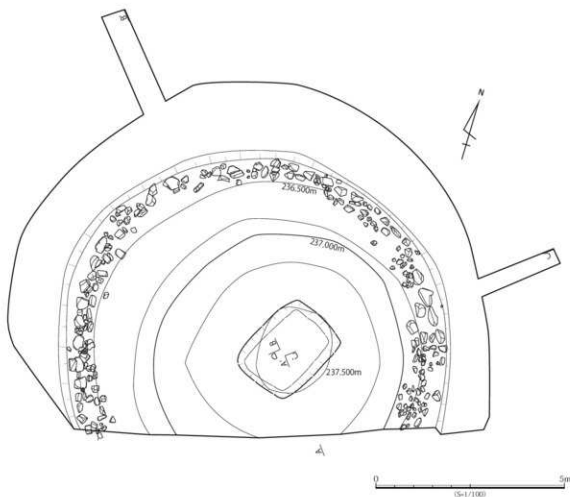
1 寄貞第7号古墳

(1) 墳丘・周溝

第1～7号古墳は丘陵頂部に位置し、第7号古墳は頂部平坦面の西縁に立地する。発掘調査前の墳丘頂部の標高は、約237.6mである。本古墳は山道が南側を蛇行するように通り、墳丘裾が既に削平されていたが、工事により更に削平された状態で発掘調査を開始した。

表土を除去した結果、墳丘規模が東西約13m、南北（現存）約9mの円墳を確認した。墳丘の南側は削平されているため詳細は不明であるが、本来、直径約13mの規模と考えられる。高さは、東側の墳丘裾から約1.43mである。高所側には墳橋に沿って弧状に溝が廻り、幅は約2.7m、深さは約30cmである。墳丘は黄褐色～赤褐色～明褐色系の明るい粘質土を上層に、黒褐色～黒色（黒フク）系の粘質土を下層に盛られて構築されており、地山面から墳頂部までは約1.26mである。

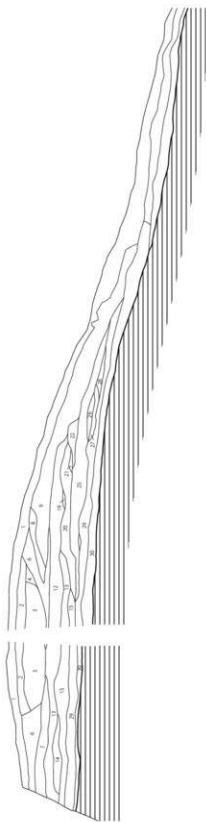
墳裾から墳丘斜面下方には、径（辺）が10cm程度のものから60cmまでの礫を墳丘裾部に幅30～50cmの幅で葺石が廻らされている。葺石は、大形の礫を墳端に配し、それより上方に向かっ



第5図 第7号古墳墳丘測量図(1:100)

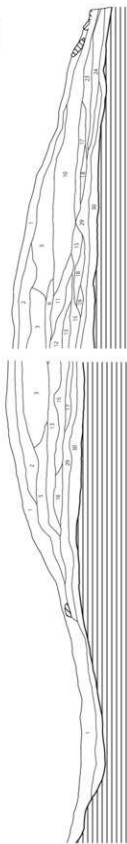
237 80m. E.

237 80m. A. B.



237 80m. D.

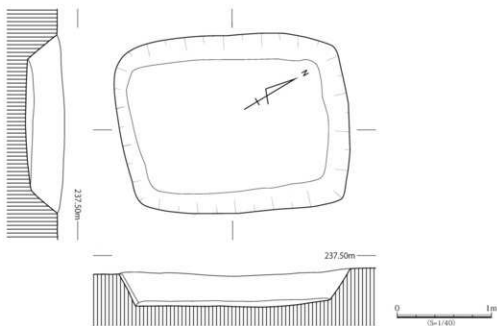
237 80m. C. D.



- | | | |
|-----------------------------|------------------------------|-------------------------|
| 1. 表土 | 11. 暗褐色粘質土 (赤褐色～黄褐色のプロックを含む) | 21. 黄褐色粘質土 (20層よりやや明るい) |
| 2. 黄褐色粘質土 | 12. 暗褐色粘質土 | 22. 暗褐色粘質土 |
| 3. 赤褐色粘質土 | 13. 暗褐色粘質土 (黄褐色のプロックを多く含む) | 23. 暗褐色粘質土 (黒色プロック含む) |
| 4. 赤褐色粘質土 (塊状体) | 14. 黄褐色粘質土 | 24. 暗褐色粘質土 |
| 5. 黄褐色粘質土 | 15. 黄褐色粘質土 | 25. 暗褐色粘質土 |
| 6. 暗褐色粘質土 | 16. 赤色粘質土 | 26. 黄褐色粘質土 |
| 7. 暗褐色粘質土 (赤～黄褐色のプロックを多く含む) | 17. 暗褐色粘質土 (黄褐色粘質土のプロックを含む) | 27. 暗褐色粘質土 |
| 8. 暗褐色粘質土 | 18. 暗褐色粘質土 | 28. 黄褐色粘質土 |
| 9. 赤褐色粘質土 | 19. 赤色粘質土 | 29. 暗褐色粘質土 (黒フク) |
| 10. 黄褐色粘質土 (5層に比べやや強い) | 20. 黄褐色粘質土 (暗褐色土のプロックを多く含む) | 30. 暗褐色粘質土 (29層の強土) |



第6図 第7号古墳墳丘層断面図(1:60)



第7図 第7号古墳主体部実測図(1:40)

ては小形の礫を配し、比較的整然と葺かれている。

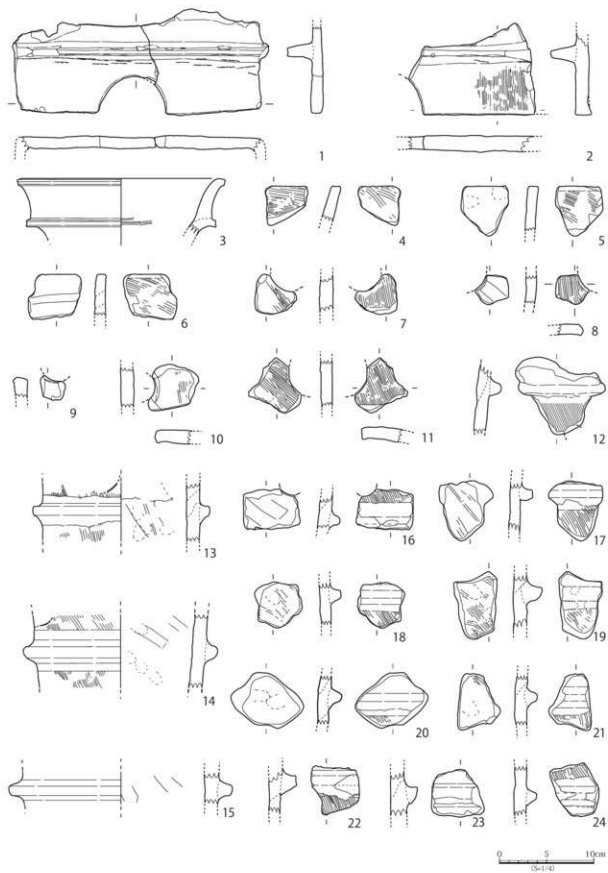
墳丘及び墳裾周辺、周溝からは埴輪が出土し、円筒埴輪がほとんどであるが、家形埴輪が墳丘表土層、朝顔形埴輪が周溝から出土している。

(2) 主体部(土坑)

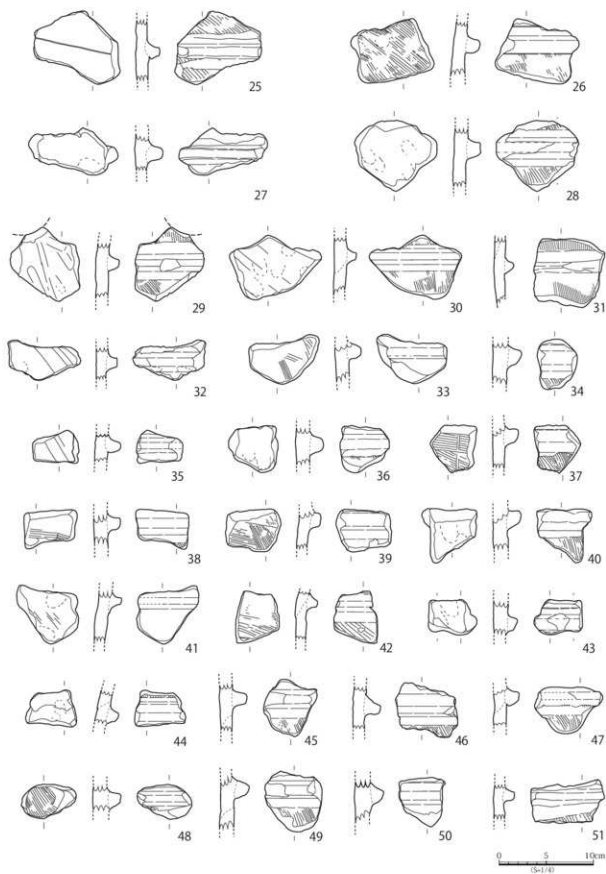
墳丘の頂部のほぼ中央で、墳頂から約20cm下位で土坑を1基検出したが、本来、掘り込み面はもう少し上位と考えられる。土坑の平面形はやや不明瞭なものの方角を呈し、上端が南北約240cm、東西約190cm、床面(下端)が東西約220cm、南北約140cm、深さ27～34cmの規模で、壁の立ち上がりはやや緩やかで約 120° ～ 130° で、床面はほぼ平坦であるが、北側が僅かに高い。主軸はほぼ東西方向(N- 12° E)である。土坑は長方形を呈さず方形に近く、検出においても不明瞭な状況もあったが、木棺が納置されていたと推定されるが、裏込め土や小口の掘り込み等は確認できなかった。遺物は出土しなかった。

(3) 出土遺物(第8・9図、図版10・11)

埴輪 1・2は家形埴輪の壁体下部であり、高さ約2.5cmの突帯がめぐり、その下に半円形の透かしが穿たれている。3は朝顔形埴輪の口縁部で、復元口径20.6cmである。4～51は円筒埴輪で、突帯は磨滅によるものもあるが低く丸みを帯びるものや遺存状態が比較的良好で断面コ字状を呈するものもある。全形がわかるものはないが、13～15は復元径が18.8cm、20.6cm、23.6cmで径20cm前後と推定される。外面はハケ調整である。



第8图 第7号古墳出土遺物実測図(1)(1:4)



第9图 第7号古墳出土遺物実測図(2)(1:4)

第1表 第7号古墳出土遺物一覧(埴輪)

No.	種類	出土地点	残存部位	法量 (cm)	透孔	調整	実部 (cm)			備考
							高さ	上端幅	下端幅	
1	家形	第7号古墳 表土層	壁体下端		半円	外) 実帯粘付時の工具痕	2.5	0.8	1.9	一辺27cm前後か
2	家形	第7号古墳 表土層	壁体下端		半円	内) ハケ	2.5	0.7	1.9	
3	納箱形	第7号古墳 周溝内	口縁部	口径 (20.6)		外) ヨコナデ 内) ハケ	0.7	0.7	1.0	
4	円筒	第7号古墳	口縁部			外) ハケ後ナデ 内) ハケ後ナデ、指頭痕	—	—	—	
5	円筒	第7号古墳	口縁部			外) ハケ後ナデ 内) 指頭痕	—	—	—	
6	円筒	第7号古墳	口縁部			外) ハケ後ナデ 内) 削り後ナデ	—	—	—	
7	円筒	第7号古墳	胴部		円	外) ハケ 内) ヘラ削り後ナデ	—	—	—	
8	円筒	第7号古墳	胴部		円	外) ハケ 内) 削り後ナデ	—	—	—	
9	円筒	第7号古墳	胴部		円		—	—	—	
10	円筒	第7号古墳	胴部		円	外) ハケ後ナデ	—	—	—	
11	円筒	第7号古墳	胴部		円	外) ハケ 内) ハケ	—	—	—	
12	円筒	第7号古墳	胴部実部		円	外) ハケ	1.2	—	1.9	
13	円筒	第7号古墳	胴部実部	胴部径 (16.1)	円	外) ハケ 内) 指頭痕	1.1	1.0	2.2	
14	円筒	第7号古墳	胴部実部	胴部径 (17.0)	円	外) ハケ 内) ヘラ削り後ナデ	1.2	1.2	2.4	
15	円筒	第7号古墳	胴部実部	胴部径 (20.8)		内) ヘラ削り後ナデ	1.4	1.1	2.2	
16	円筒	第7号古墳	胴部実部			外) ハケ 内) ヘラ削り後ナデ	0.9	0.6	—	
17	円筒	第7号古墳	胴部実部			外) ハケ 内) ハケ	1.5	0.8	1.3	
18	円筒	第7号古墳	胴部実部			外) ハケ 内) 指頭痕	1.0	0.9	1.7	
19	円筒	第7号古墳	胴部実部			外) ハケ後ヨコナデ、指頭痕 内) ハケ、指頭痕	1.4	1.4	2.0	
20	円筒	第7号古墳	胴部実部			外) ハケ 内) 指頭痕	1.2	0.8	2.3	
21	円筒	第7号古墳	胴部実部			外) ハケ 内) ハケ後ナデ	1.0	0.8	1.8	
22	円筒	第7号古墳	胴部実部			外) ハケ	1.4	1.0	2.3	
23	円筒	第7号古墳	胴部実部				1.1	1.2	1.7	
24	円筒	第7号古墳	胴部実部			外) ハケ	1.1	0.7	1.1	
25	円筒	第7号古墳	胴部実部			外) ハケ後ナデ 内) ナデ	1.2	0.9	1.1	
26	円筒	第7号古墳	胴部実部			外) ハケ 内) ハケ後ナデ、指頭痕	1.4	1.3	1.9	
27	円筒	第7号古墳	胴部実部			内) 指頭痕	1.6	1.0	1.7	
28	円筒	第7号古墳	胴部実部			外) ハケ 内) 指頭痕	1.3	1.2	2.2	
29	円筒	第7号古墳	胴部実部		円	外) ハケ	1.1	0.8	1.8	
30	円筒	第7号古墳	胴部実部			外) ハケ 内) 指頭痕	0.9	0.7	1.7	
31	円筒	第7号古墳	胴部実部			外) ハケ	0.9	0.5	1.9	
32	円筒	第7号古墳	胴部実部			外) 指頭痕 内) 指頭痕	0.9	0.9	1.3	
33	円筒	第7号古墳	胴部実部			内) ハケ後ナデ	1.2	0.9	—	
34	円筒	第7号古墳	胴部実部			外) ハケ	1.3	1.5	2.6	
35	円筒	第7号古墳	胴部実部			内) 削り後ナデ	1.3	7.0	1.6	

No.	種類	出土地点	残存部位	法量 (cm)	透孔	調整	実帯 (cm)			備考
							高さ	上端幅	下端幅	
36	円筒	第7号古墳	胴部突帯			外) ハケ後ナデ 内) 指頭直	1.4	1.0	2.1	
37	円筒	第7号古墳	胴部突帯			外) ハケ 内) ナデ	1.3	1.3	2.0	
38	円筒	第7号古墳	胴部突帯			外) ハケ 内) ハケ後ナデ	1.3	1.0	2.3	
39	円筒	第7号古墳	胴部突帯			内) ハケ後ナデ	0.9	1.3	2.0	
40	円筒	第7号古墳	胴部突帯			外) ハケ 内) 指頭直	1.4	1.3	2.2	
41	円筒	第7号古墳	胴部突帯			内) 指頭直	1.0	0.7	1.7	
42	円筒	第7号古墳	胴部突帯			外) ハケ 内) ハケ後ナデ	1.0	0.6	1.9	
43	円筒	第7号古墳	胴部突帯			内) 指頭直	0.9	1.3	1.8	
44	円筒	第7号古墳	胴部突帯			外) ハケ 内) 指頭直	1.0	1.0	—	
45	円筒	第7号古墳	胴部突帯			外) ハケ	1.4	0.9	2.0	
46	円筒	第7号古墳	胴部突帯			外) ハケ	1.6	0.8	2.1	
47	円筒	第7号古墳	胴部突帯			外) ハケ	1.2	0.9	1.9	
48	円筒	第7号古墳	胴部突帯			内) ハケ	1.2	0.8	1.9	
49	円筒	第7号古墳	胴部突帯			外) ハケ	1.6	1.0	2.0	
50	円筒	第7号古墳	胴部突帯				1.2	1.0	2.3	
51	円筒	第7号古墳	胴部突帯			外) ハケ	1.0	0.8	1.5	

※法量の()は復元値。

2 寄貞第8号古墳

(1) 墳丘・周溝

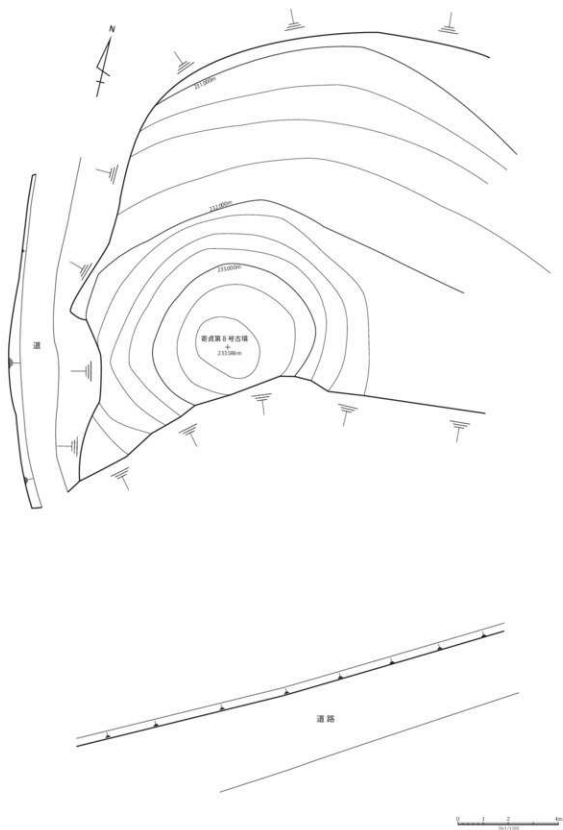
第8号古墳は、第1～7号古墳が立地する丘陵頂部平坦面から南に延びる丘陵尾根筋の小高い地形上に立地し、第1～7号古墳より約7m低く、第7号古墳から約50m離れている。発掘調査前の墳丘頂部の標高は、約233.6mである。本古墳も工事により墳丘裾部の一部が破壊された状態で発掘調査を開始した。

表土を除去した結果、墳丘規模が東西、南北ともに約12mの円墳を確認した。高さは、墳丘裾から約1.2mである。墳丘は褐色系の粘質土を上層に、褐色系の粘質土を下層にほぼ水平に盛られて構築されており、地山面から墳頂部まで約1.05mである。

(2) 主体部

墳丘の中央部で主軸を略東西に指す2基の埋葬施設を検出した。2基は並葬されているが、主軸は約12°ずれている。北側が竪穴式石室(第1主体部)、南側が木棺の周囲に礫を配した土坑(第2主体部)である。第1主体部は墳頂から10～20cm下位で検出し、第2主体部は墳頂から20～30cm下位で検出したが、2基とも埋葬施設の石材の一部が露出、或いは検出時に浮いた状態であったことから構築(掘り込み)面は検出面より上位と考えられる。土層から2基の前後関係は確認できなかったが、第1主体部の床面は第2主体部床面より低位である。

墳丘の頂部や裾、表土層から須恵器が出土している。これらは破片のものもあり、また、墳頂部は削平や盗掘などの攪乱を受けているものと考えられることから、原位置は不明であるが、墳頂部の埋葬施設周辺等に供献されていた可能性がある。



第10図 第8号古墳調査前地形測量図(1:150)

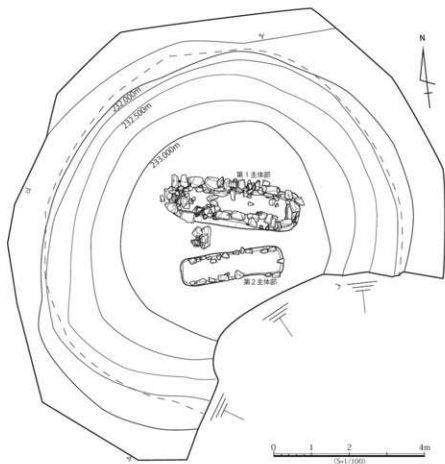
第1主体部(竪穴式石室)

北側に位置する第1主体部は小型の竪穴式石室である。東西の両小口は平石を立てて片側に補足の石を立て、南北の側壁は、基底部に長方形の平石を縦長に立て、その上に小形の礫の小口面を内側にして2～3段積み石室を構築している。石室の内法は長さ(東西)259cm、幅(南北)68cmであり、高さは50～58cmである。石室の掘方は、長さ(東西)358cm、幅(南北)115cmである。石室の主軸はN78°Wであり、頭位は石室の構築法・掘方の幅から東と考えられる。なお、検出時に石材の一部が露出していたことから、上部はいくらか破壊されていたものと考えられ、蓋石は確認できなかった。

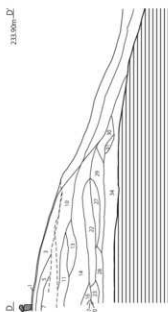
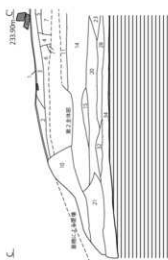
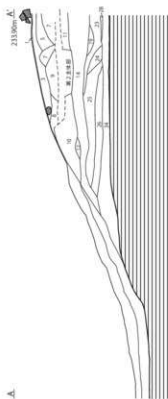
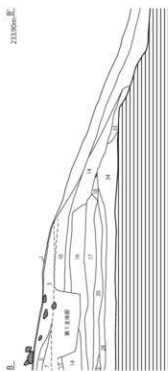
第2主体部(土坑)

南側に位置する第2主体部は木棺の周囲に礫を配した土坑である。土坑は、上端が長さ(東西)271cm、幅(南北)が中央で71cm、東側と西側で74cmであり、床面(下端)は、長さ(東西)259cm、幅(東西)60cmであり、深さは19cmである。土坑の壁に沿うように辺10～25cm大の礫を東側中央に1個、南側に8個、北側に12個配している。これらの礫は高さが異なっており、木棺の小口板、側板を押さえていたものと考えられる。底面は断面が緩やかなU字状を呈している。土坑の主軸方向はN90°Eであり、頭位は東と考えられる。

遺物は、床面の北東部から辻金具(21)と刀子(36)、同じく北西部から鉄鎌(17～19)が出土した。

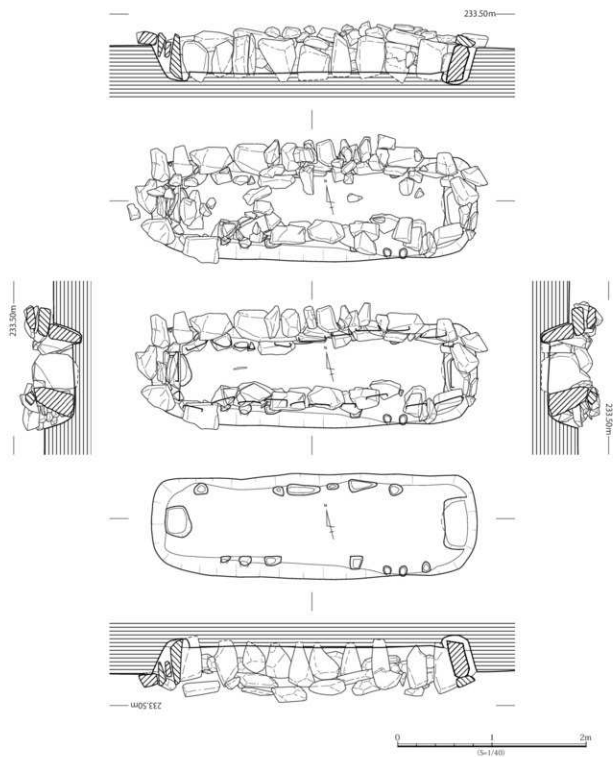


第11図 第8号古墳墳丘測量図(1:100)

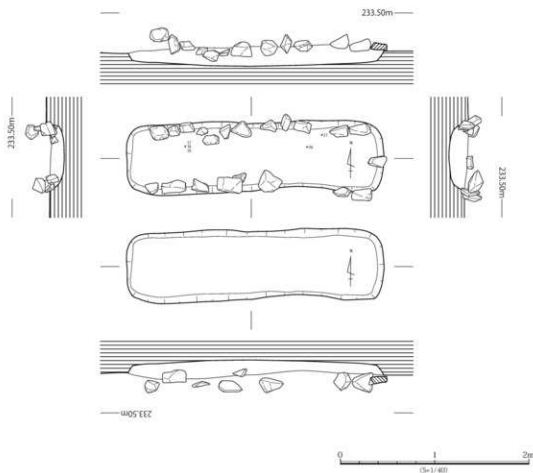


- | | | |
|----------------------------|---------------------------------|--------------------------|
| 1. 黄土 | 21. 暗茶褐色粘質土 (灰黄色土を含む) | 31. 暗茶褐色粘質土 |
| 2. 暗茶褐色粘質土 | 22. 暗茶褐色粘質土 (まばらに黄褐色土含む) | 32. 灰黄色粘質土 (134層よりやや濃い色) |
| 3. 黄褐色粘質土 | 23. 灰黄色粘質土 | 33. 茶褐色粘質土 (他山の茶褐色土混入) |
| 4. 灰黄色粘質土 (体の粗による礫混) | 24. 暗茶褐色粘質土 | 34. 茶色粘質土 |
| 5. 黄褐色粘質土 | 25. 灰黄色粘質土 (黄褐色土の混入なし) | |
| 6. 灰黄色粘質土 | 26. 灰黄色粘質土 (黄褐色土まばらに含む) | |
| 7. 暗茶褐色粘質土 (オレンジ色のハイラン土含む) | 27. 灰黄色粘質土 | |
| 8. 黄褐色粘質土 | 28. 暗茶褐色粘質土 (トレンチ層部の理、土砂層片散在層出) | |
| 9. 灰黄色粘質土 | 29. 暗茶褐色粘質土 (灰黄色土・黄褐色土混入) | |
| 10. 茶褐色粘質土 | 30. 灰黄色粘質土 | |

第12図 第8号古墳墳丘土層断面図(1:60)



第13图 第8号古墳第1主体部实测图(1:40)



第14図 第8号古墳第2主体部実測図(1:40)

(3)出土遺物(第15・16図, 図版12・13)

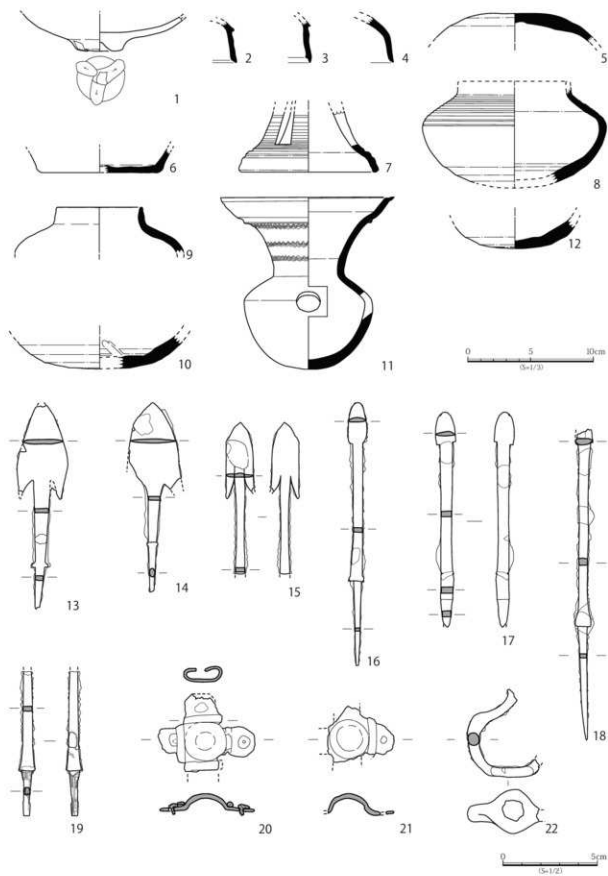
遺物として土師器, 須恵器, 馬具(辻金具・轡), 鉄鏃, 刀子, 鉄鎌, 鉄鋤鉞先がある。

土師器 1は, 高杯の杯部で脚部が除かれ3方向に溝状の凹部がつくられている。杯転用の可能性がある。

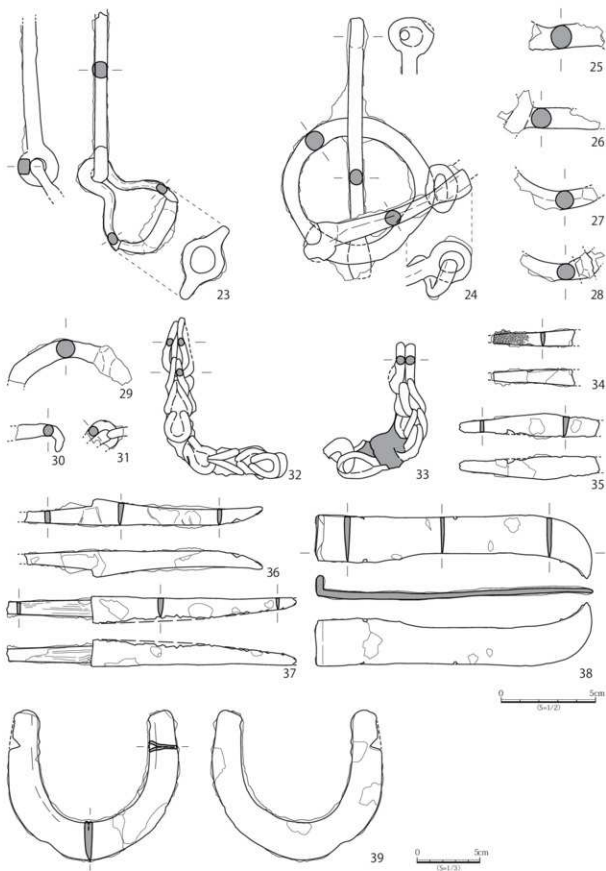
須恵器 2～5は杯蓋で, 2～4は口縁部で, 2・3は端部に段をもち, 天井部との境に稜をもち, 4は端部が丸みをもち, 天井部との境に稜をもたず, 5は天井部である。6は杯の底部と考えられる。7は高杯の脚部で, 台形の透かし窓が穿たれ, 脚端部に沈線が巡らされ下方に曲げられている。8・9は短頸壺で, 8は体部上半にカキ目がみられ, ともに底部が欠失している。10は小形の壺の底部と考えられる。11・12は甕で, 11は口縁部径が体部径より大きく, 口縁部が大きく外反し, 頸部に波状文が3段施され, 段を有して口縁部となり, 端部は内傾する面をもち凹をなしている。

鉄鏃 13～15は鉄鏃で, 鏃身部が三角形で腸袂のものであり, 13・14はやや大形で棘状開である。16～19は長頸鏃で, 16・17は鏃身部が片丸造で, 頸部開は16が棘状開, 18・19が台形開である。

馬具 20・21は四脚の辻金具で, 19は1脚, 21は3脚それぞれ欠失しているが, 貴金具も残り, 1鉤留めで, 対をなすものと考えられる。22は引手の壺, 23は引手の端輪・壺, 24は正円形素



第15图 第8号古墳出土遺物実測図(1)(1:3、1:2)



第16图 第8号古墳出土遺物実測図(2)(1:2、1:3)

環状鏡板, 25は引手か, 26は鏡板・引手端輪もしくは衝端輪, 27～29は鏡板か, 30は釘もしくは鞍の基部か, 31～33は兵庫鎖である。

農工具 34～37は刀子で, 34は刃部の一部に繊維が残存し, 35は関が不明瞭, 36は片関, 37はわずかではあるが両関で茎部に木質がみられる。38は曲刃の鉄鎌で, 折り返し角度・着柄角度も直角である。39はU字形の鉄鋤鎌先で, 内縁に沿って溝をつくり, 次第に狭くなる

第2表 第8号古墳出土遺物一覧(土器)

No.	種別 器種	出土地点	法量 (cm)	色 調	胎 土	焼成	形態・手法の特徴など	備 考
1	土師器 高杯			外) 濃い黄褐色 内) 濃い黄褐色	1mm程度の 砂粒含む	良好	外) コナナ 内) コナナ	胴部を除き, 中に転写? 胴部部へうすり, 3方向に溝状の凹部
2	須恵器 杯蓋	第8号古墳 壇丘部		外) 淡青灰色 内) 淡青灰色	1～2mm程度の の砂粒含む	良好	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
3	須恵器 杯蓋	第8号古墳 壇丘部		外) 淡青灰色 内) 淡黄灰色	精良	良好	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
4	須恵器 杯蓋	第8号古墳 表土層		外) 濃黄灰色 内) 濃黄灰色	精良	良好	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ	
5	須恵器 杯蓋	第8号古墳 壇丘部		外) 暗黄灰色 内) 淡灰白色	精良	良好	外) 回転ナデ 内) ロクロナデ	
6	須恵器 杯蓋	第8号古墳 表層埋土 東側埋土 (9.1)	底部径 (10.5)	外) 濃黄灰色 内) 濃黄灰色	精良	良好	外) 回転ナデ, ナデ 内) 回転ナデ	
7	須恵器 高杯脚部	第8号古墳 表土層	底部径 (10.5)	外) 淡黄灰褐色 内) 淡黄灰色	0.5～1mm程度の の砂粒含む	普通	外) 回転ナデ, カキ目, 沈線2条, 三方向に長方形の透かし 内) 回転ナデ	自然焼付着
8	須恵器 短胴壺	第8号古墳 表土層	体部最大径 (14.6)	外) 淡灰白色 内) 淡灰褐色	精良	良好	外) 回転ナデ, 回転へうすり, カキ目, 沈線2条 内) 回転ナデ	自然焼付着
9	須恵器 短胴壺	第8号古墳 表土層	口径(6.6)	外) 暗青灰色 内) 淡黄灰色	0.5～1mm程度の の砂粒含む	良好	外) 回転ナデ, 回転へうすり 内) 回転ナデ	
10	須恵器 底部(巻?)	第8号古墳 表土層		外) 濃青灰色 内) 淡灰白色	0.5mm程度の の砂粒含む	良好	外) 回転へうすり 内) 回転ナデ, へうすり工具痕	
11	須恵器 罐	第8号古墳 第2主体部 上面	口径13.8 高さ13.6 体部最大径 10.2	外) 灰黄色 内) 黒褐色	1mm程度の 砂粒含む	良好	外) 回転ナデ, 回転へうすり, 波状文条 内) 回転ナデ	自然焼付着
12	須恵器 底部(巻?)	第8号古墳 壇頂部		外) 暗黄灰色 内) 黄灰色	5mm程度の の砂粒含む	良好	外) 回転ナデ, 回転へうすり 内) 回転ナデ	

※法量中の () は復元値。

第3表 第8号古墳出土遺物一覧(鉄製品—鉄鑑—)

No.	出土地点	法量 (cm)				重量(g)	分 類	備 考
		全長	鎌身長	鎌部長	茎部長			
13	第8号古墳 第2主体部	(10.7)	(4.9)	4.6	(2.2)	9.25	鋼鉄三角形	茎間に棘状突起
14	第8号古墳 第2主体部	(10.0)	(4.5)	3.0	(2.6)	10.07	鋼鉄三角形	茎間に棘状突起
15	第8号古墳 第2主体部	(8.0)	4.0		(5.2)	3.92	鋼鉄三角形	下面はフラット
16	第8号古墳 第1主体部	13.9	2.0	6.3	4.4	7.78	長柄 鎌身部片丸造	鎌身部片丸造, 茎間に棘状突起
17	第8号古墳 第2主体部	(11.4)	1.7	8.2	(1.5)	7.92	長柄 鎌身部片丸造	鎌身部片丸造
18	第8号古墳 第2主体部	(16.4)	(8.7)	(9.7)	6.0	11.14	長柄	
19	第8号古墳 第2主体部	(7.6)		(5.2)	2.3	4.53	長柄 鎌身部欠損	鎌身部欠損

※法量中の () は復元値。

第4表 第8号古墳出土遺物一覧(鉄製品-馬具-)

No.	種 類	出 土 地 点	現状の法量 (cm)			部 部 法 量 (cm)	重量(g)	備 考
			長さ	幅	厚さ			
20	辻金具	第8号古墳 第2主体部	(5.1)	(4.1)	(1.5)	半球径2.1, 脚部幅1.6, 脚部長さ1.4, 穿孔径0.2	10.21	曲製用か。21と対か。 部2か所残存。1か所欠損
21	辻金具	第8号古墳 第2主体部	(3.0)	(3.0)	(1.1)	半球径2.1, 脚部幅1.6, 脚部長さ1.3, 穿孔径0.3	4.71	曲製用か。20と対か。部欠損。
22	引手杵	第8号古墳 第2主体部	(4.6)	(3.8)	(2.3)		9.90	
23	引手の端輪・杵	第8号古墳 第2主体部	(12.2)	(5.4)	(2.4)	端輪：長さ2.0, 幅2.1, 厚さ0.7 杵：長さ6.3, 幅4.4, 厚さ2.4	43.63	
24	正円形素戔瓊鏡板	第8号古墳 第2主体部	(13.9)	(10.0)	(5.4)	引手：長さ13.9, 幅0.9, 厚さ2.4 鏡板：長さ7.6, 幅7.7, 厚さ0.9 脚：長さ10.1, 幅2.2, 厚さ0.9 引手端輪径2.4, 榫端輪径2.3	136.03	榎浦兵庫御遺物
25	馬具(引手杵)		(4.0)	(3.3)	(1.2)		9.78	
26	鏡板・引手端輪 または榫端輪	第8号古墳	(5.4)	(2.3)	(1.0)		10.50	
27	鏡板か	第8号古墳 第2主体部	(4.4)	(1.9)	(1.0)		6.93	
28	馬具(鏡板か)		(4.4)	(1.6)	(1.8)		8.16	
29	鏡板か	第8号古墳 第2主体部	(6.5)	(2.4)	(1.2)		13.60	
30	鉄釘 または靴の基部か	第8号古墳 第2主体部	(2.5)	(1.5)	(0.7)		1.94	
31	兵庫鍔	第8号古墳 第2主体部	(1.9)	(1.4)	(0.8)		2.13	
32	兵庫鍔	第8号古墳 第2主体部	(8.5)	(6.6)	(2.8)		53.07	
33	兵庫鍔	第8号古墳 第2主体部	(6.5)	(1.4)	(1.6)		45.09	

※法量の()は現長。

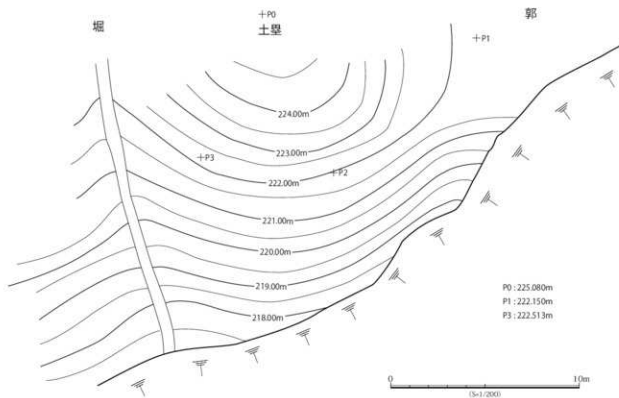
第5表 第8号古墳出土遺物一覧(鉄製品-刀子-)

No.	出 土 地 点	法 量 (cm)				重量(g)	備 考
		全長	刀部長	刀部幅	茎部長		
34	第8号古墳 第2主体部	(4.3)				2.36	刀部に腐蝕残存
35	第8号古墳 第2主体部	(7.4)	(5.5)	(0.7)	(1.9)	4.84	
36	第8号古墳 第2主体部	(12.6)	8.9	(1.4)	(3.6)	10.44	
37	第8号古墳	(15.3)	(10.8)	(1.4)	(4.4)	13.91	柄の木質残存

※法量の()は現長。

第6表 第8号古墳出土遺物一覧(鉄製品-その他-)

No.	種 類	出 土 地 点	法 量 (cm)				重量(g)	備 考
			最大長	最大幅	最大厚	その他		
38	鉄鎌	第8号古墳 第2主体部	14.6	2.5		刀部厚0.35	24.36	曲刀
39	鉄鋤銚先	第8号古墳 第2主体部(上面?)	12.1	13.6	0.6	刀部厚3.2	130.72	J字形



第17図 寄貞城跡地形測量図(1:200)

3 寄貞城跡

城跡は、寄貞古墳群から南東に延びた尾根の先端部に位置する。城跡の標高は223m前後で、古墳群との比高は15m弱であり、周辺の平地(水田)との比高は10m余である。城跡は、背後(北西側)を土塁と堀によって画されている。堀の断面はU字状を呈し、傾斜は緩やかである。土塁は自然地形を利用し立ち上がりは緩やかで、断面は蒲鉾状を呈し下端の幅が幅広い。主となる郭は広い平坦面を有し、その周囲の一段低い斜面に小型の郭が配されている。丘陵先端部(南東側)に小形の郭、更に下方の先端部から西側斜面にかけて帯郭と推定される幅狭く小型の郭が確認されている。

城跡の南側斜面が備北農道工事により削平されるため、地形測量を行った。南側の斜面、特に裾部分は既に削平されていた。このため遺跡の状態、作業の安全、工事区域等を考慮して地形測量は堀跡から土塁跡の南側斜面部を行った。

V まとめ

奇貞古墳群は、昭和54年度の分布調査では8基が確認され、そのうちの2基(第7・8号古墳)について備北農道に伴い発掘調査を行った⁽¹⁾。ここでは奇貞第7・8号古墳の発掘調査の成果から特筆されることについてまとめる。

本古墳群は、現在4基しか確認できず、丘陵も道路により大きく改変されていることなどから、古墳群内で第7・8号古墳のあり方を立地等から比較することは難しい点もあるが、これまでの記録をもとに整理する。8基の古墳は全て円墳であり、第1～7号古墳は丘陵の頂部に立地し、第8号古墳は南に延びる一段低い鞍部の高まりに立地している。規模についてみると、第7・8号古墳が直径12～13m、第2号古墳が直径約10m、第6号古墳が直径約8m、第1・3～5号古墳が直径6m前後である。第8号古墳は少し離れて一段低い位置にあり、第7号古墳も丘陵頂部の中央より南に緩やかに下る丘陵頂部平坦面の縁部に立地する。古墳群の中で最も中心的な位置にあるのは第2号古墳であるが、規格的には第7・8号古墳より小規模である。これらの古墳(群)は東側を意識していると考えられることから、規格的に第7・8号古墳は大型であるが立地から古墳群の中で後の築造と考えられる。

第7・8号古墳は、ともに円墳であり、規模は前者が直径約13m、後者が直径約12mで前者がやや大型である。墳丘について、前者は葺石が廻り、埴輪が配置されていたが、後者では確認できなかった。埋葬施設としては、前者が土坑、後者が小型の竪穴式石室と周縁に磔を配する土坑(木棺)である。遺物としては、第7号古墳では埴輪以外に出土していないが、第8号古墳では埴輪頂部から土師器・須恵器、埋葬施設から武器、馬具、農具が出土している。

第7号古墳は、小規模古墳であるが葺石と埴輪(円筒・朝顔形・家形)を伴う。三次地域において、中期後葉から後期前葉にかけての小規模古墳で葺石を伴う場合、墳丘の中ほどに鉢巻状に配される例や墳丘の一部に配される例など墳丘を全周して整った葺石をもつ古墳は稀で、本古墳のように大型の石材を埴輪に配し、その上部に小型の石材を配して墳丘を全周する比較的整然とした葺石は稀である。また、三次地域の小規模古墳から埴輪が出土する例としては、久々原第6号古墳(西酒屋町)、大坂第6・7号古墳(西酒屋町)、四拾貫小原第17号古墳(四拾貫町)、野稲南第9号古墳(向江田町)、岡田山第3号古墳(三良坂町)などがある。本古墳の埴輪は小片で出土量は少なく、円筒埴輪は限られた数と考えられる。また、朝顔形埴輪、家形埴輪の破片が出土しているが、三次市内において朝顔形埴輪が出土した古墳は6例、家形埴輪が出土した古墳は5例である。三次地域において葺石と埴輪がそろった5世紀後葉から6世紀前半にかけての小規模古墳はこれまで確認されていない。第7号古墳出土の埴輪は器表面の磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、突帯の形態などから埴輪の編年V期の新しい時期と考えられる⁽²⁾。広島県における中期から後期にかけての埴輪樹立古墳の系譜関係について大きく3類型に分けられているが、当該地域は「A類型:中期から続く首長墳に継続して樹立されるが、徐々に小規模墳に樹立される地域。(庄原地域・三次地域・沼田川流域)」にあたり、集成9期前半には埴輪の樹立が終焉を迎えるようである⁽³⁾。こうした流れの中で捉えられる古墳と考えられる。葺石と埴輪を伴う本古墳は、古式群集墳が盛行する時期において小規模古墳の中で核となる古墳と考えられる。

第8号古墳は2基の埋葬施設があり、墳頂部から須恵器が出土しており、これらは埋葬施設上又はその周辺に置かれていたものと推定される。第8号古墳出土の須恵器は杯蓋、高杯にやや古式の傾向がみられるものの臚の頸部が長くなるなど新しい傾向もみられることから陶器編年のMT15併行の時期にあたと考えられる⁽⁴⁾。埋葬施設の規模・形態などから第1主体部が中心と考えられるが、鉄鎌が1点出土したのみである。それに対して第2主体部からは、武器、馬具、農具が出土し小規模古墳としては多様な鉄製品が出土している。なかでも馬具は複連兵庫鎖連結正円形素環状鏡板付轡と考えられ、実用性のある古式の形態のものである⁽⁵⁾。三次地域において馬具が出土した古墳としては、三玉大塚古墳(吉舎町)、四拾貫小原第16号古墳(四拾貫町)、札幌古墳(後山町)、宮の本第20号古墳(向江田町)、勇免第10号古墳(大田幸町)、上川立七ツ塚第3号古墳(上川立町)、田戸南第2号古墳(三良坂町)、宮蔵古墳(三和町)がある。三玉大塚古墳は当該地域における中期の大型古墳＝首長墓であり、他の古墳は横穴石室である。広島県内の古墳から馬具が出土した例としては約50例あるが、その内横穴式石室以前の6世紀前葉までの例は非常に稀である。第8号古墳は横穴式石室の古墳が築造される以前の小規模古墳であり、出土の轡は環状鏡板付轡のI段階にあたり、古式のもので稀少な例である⁽⁵⁾。また、第8号古墳は、武器(鉄鎌)、工具(刀子)、農具(鉄鎌、鉄鋤鎌先)がセットで出土しており、馬具を合わせた副葬品の組成は三次地域で初めての確認である。あわせて、鉄鎌(曲刃)と鉄鋤鎌先(U字形)が共に出土した古墳もこれまでのところ確認されていない。鉄鎌は曲刃鎌I B類で折り返し部は乙技法であり、鉄鋤鎌先はU字形刃先II A 2類に分類され、鉄鎌(曲刃)の乙技法は後期(9・10期)にはみられなくなるとされている⁽⁶⁾。これらは日本列島における農具鉄器化の三つの画期における第三の画期(古墳時代中期中葉)でこの鉄鋤鎌先(U字形)と鉄鎌(曲刃)をセットとする新しい農具の出現は朝鮮半島からの体系的な技術導入の一環と考えることが可能であるとされている⁽⁷⁾。ただ、鉄鋤鎌先(U字形)と鉄鎌(曲刃)は、中期後半になって初めて急速に全国に普及したと指摘されており、中期後半以降から後期にかけてより小規模な円墳などに広域的に鉄鋤鎌先(U字形)や鉄鎌(曲刃)が副葬されるようになり、農具副葬のあり方に変化がみとめられるとされている⁽⁸⁾。こうした流れの中で第8号古墳は考えられる。三次地域において、鉄鎌(曲刃)が出土した古墳は比較的限られており、また、寺側古墳(三若町)、植松第3号古墳(三良坂町)、長畑山北第4号古墳(吉舎町)の横穴式石室の古墳から鉄鎌(曲刃)が出土している。鉄鋤鎌先(U字形)が出土した古墳はさらに限られ、酒屋高塚古墳(西酒屋町)、帆立貝形古墳・墳長推定46m)、四拾貫小原第1号古墳(円墳・直径24×26m)、三玉大塚古墳(帆立貝形古墳・墳頂41m)、緑岩古墳(南畑敷町、円墳・直径19.5m)であり、これらは帆立貝形古墳や中規模の円墳である。また、横穴式石室からの出土は確認されていない。三次地域においては、限られた古墳、時期に副葬された遺物であり、古式群集墳の築造の時期であるとともに、副葬品の組成における変化の時期にあたる。鉄鎌、刀子は古墳時代を通じて副葬され、当該地域においても多くの古墳から出土している。寄貞第8号古墳の遺物の組成、その中で馬具、鉄鎌(曲刃)、鉄鋤鎌先(U字形)を基に三次地域の古墳からの遺物出土状況(副葬品の組成)を整理すると、鉄鎌+刀子+鉄鎌(曲刃)+鉄鋤鎌先(U字形)+馬具は寄貞第8号古墳、鉄鎌+刀子+鉄鎌(曲刃)+鉄鋤鎌先(U字形)は四拾貫小原第1号古墳⁽⁸¹⁾、鉄鎌+刀子+鉄鎌(曲刃)は上四拾貫第3号古墳⁽⁸²⁾(四拾貫町)、大番奥池第2号古墳(SK1)(吉舎町)、勇免第4号古墳、長畑山北第1号古墳⁽⁸³⁾、鉄鎌+鉄鎌(曲刃)は大番奥池第7号古墳⁽⁸⁷⁾、

刀子+鉄鎌(曲刃)は久々原第5号古墳? (西酒屋町)、宮の本第22号古墳⁽⁸⁴⁾、勇免第2号古墳?、鉄鎌(曲刃)のみは久々原第8号古墳?、寺山第1・2号古墳^(85・6)(三良坂町)、植松第4号古墳、大番奥池第2号古墳(SK 2)、鉄鎌+刀子+鉄鋤鎌先(U字形)+馬具は三玉大塚古墳、鉄鎌+刀子+鉄鋤鎌先(U字形)は酒屋高塚古墳、鉄鎌+鉄鋤鎌先(U字形)は緑岩古墳⁽⁸³⁾である。以上のように、第8号古墳と同じ遺物の組成の古墳はなく、武器類、農具類がセットで副葬され、古式の馬具を有している中期から後期前葉における小規模古墳はこれまでのところ三次地域のみならず広島県内では確認されていない。古墳の副葬品について、中期に遡って武器組成に農具が組み込まれる可能性が指摘されている。このような農具の存在は、中期に入って新たに台頭する、特に武器の副葬に特化した一部の新興中小古墳群を中心にしてみられる現象であることが明らかにされ、農具が組み込まれた装備の存在から、ヤマト政権の軍事活動との関係が考えられている⁽⁹⁾。第8号古墳の副葬品の組成は、ヤマト政権との関わり、古墳時代中期以降、より中央集権化が進んだ日本列島の地域支配の変化に連動していると考えられる。

三次地域において当該期は群集墳が形成される時期であるが、当該地域は三次市の南東部の地域に比べて大規模に古墳が群集する古墳群はみられない。本古墳群の北北西約0.9kmには画文帯神獸鏡が出土した大型の帆立貝形古墳の酒屋高塚古墳(墳長46m推定)が存在する。この古墳は高墳丘であること、竪穴式石室の形態、鉄釘といった渡来系の要素がみられる。本古墳は小規模古墳でありながら多様な鉄製品が副葬され、なかでも古式の馬具、朝鮮半島系の農具が伴うことは、酒屋高塚古墳との関わりなど、三次地域におけるヤマト政権、渡来系文化の流入の中で本古墳群は位置づけられると考える。

【註】

- 1 寄貞古墳群は、広島県双三郡三次市史編纂委員会『双三郡三次市史料総覧』第1篇(双三郡三次市史刊行会)昭和31年では古墳9基、広島県教育委員会『広島県遺跡地図XI(三次市・庄原市)』平成18年では古墳9基、その内1基は不明とされている。平成4年度現在では古墳4基が確認できるのみである。
- 2 川西宏幸『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第64巻第2号(日本考古学会)昭和53年
- 3 手島智幸『山陽西部における後期円筒埴輪の様相』『中国四国前方後円墳研究会第15回研究会集 後期埴輪の特質とその地域的展開【発表要旨集・後期古墳出土埴輪集成】』(中国四国前方後円墳研究会第15回研究会(倉敷大会)実行委員会)2012年
- 4 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店)昭和56年
- 5 岡安光彦『いわゆる「素環の轡」について—環状鏡板付轡の形式学的分析と編年—』『日本古代文化研究』創刊号(古墳文化研究会)1984年
- 6 野島永『1 金属製品の型式学的研究 ③鉄製農耕漁具』『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』(同成社)2013年
- 7 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』(岩波書店)1989年
- 8 河野正訓『古墳時代・三国時代における外来系農具の定着過程』『日韓交渉の考古学—古墳時代—(最終報告論考編)』(「日韓交渉の考古学—古墳時代—」研究会・「日韓交渉の考古学—三国時代—」研究会)2018年
- 9 田中晋作『4 社会 ②軍事組織』『古墳時代の考古学6 人々の暮らしと社会』(同成社)2013年

【※、?の説明】

1：3基の埋葬施設から別々に出土，2：盗掘坑から出土，3：墳丘から出土，鉄鎌は曲刃の可能性?，4：鉄鎌は墳丘頂部から出土，5：刀子は箱式石棺の蓋石粘土，鉄鎌は土坑掘り方から出土，6：墳丘裾から出土，7：周溝から出土，3：鉄鎌鍔先は周溝から出土

?は曲刃鎌かどうか不明なもの。他にも形態が不明な鉄鎌があり，記載しなかったものもある。

第7表 三次市内の発掘調査された墓石をもつ古墳

No	古墳名	所在地	遺形	規模 (m)	墓石の状況	埋葬施設	文献
1	彌日高第1号墳	香河町	前方後円墳	長37	?		2
2	観ヶ谷北第1号	香河町	円墳	径12×13	墳丘の中腹，盛土の底，幅1m	土坑（組合式木棺），箱式石棺	9
3	観ヶ谷北第2号	香河町	円墳	径8×8.5	墳丘中腹に1/4のみ	箱式石棺2基	9
4	観ヶ谷北第3号	香河町	円墳	径9×8	墳丘中腹に1/3のみ	箱式石棺	9
5	菅宮古	十日市町	前方後円墳	長37.5			?
6	菅宮第3号	十日市町	円墳	径15	鉢巻状		7
7	菅宮第4号	十日市町	円墳	径15.5?	鉢巻状		7
8	高屋高塚	西高塚町	孤立貝形古墳	長46	二段築成	髷穴式石室2基	14
9	菅宮第7号	西高塚町	円墳	径13		土坑	本報古書
10	善法寺第8号	西高塚町	孤立貝形古墳	長30	?	髷穴式石室，箱式石棺2基	?
11	四給賣太郎丸	四給賣町	円墳	径26.8	一段?	髷穴式石室	3
12	四給賣日蓮第39号	四給賣町	円墳	径24	一段	粘土層	7
13	四給賣第9号	四給賣町	円墳	径14	二段	粘土層，箱式石棺	7
14	四給賣小部第1号	四給賣町	円墳	径24×26	鉢巻状	土坑，粘土層2基	5
15	上四給賣第6号	四給賣町	円墳	径17	墳丘の中腹を鉢巻状	土坑（組合式木棺）	8
16	下山手第4号	向江田町	円墳	径15	二段	土坑，箱式石棺	22
17	稲山第5号	向江田町	方墳	辺14.2×13.7	二段	箱式石棺2基，石室土坑 下段に埋葬施設3基	30
18	柳戸越前	向江田町	円墳	径12～13	香附は二段	箱式石棺	25
19	宮の本第24号	向江田町	円墳	径31×29.8	三段築成?	髷穴式石室，箱式石棺2基 横溝に埋葬施設8基	29
20	宮の本第25号	向江田町	円墳	径12.5×12	墳丘斜面下歩	箱式石棺 横溝に埋葬施設1基	29
21	上大塚	向江田町	双方中円形	長26	くびれ部		19
22	赤井大塚南	赤井町	孤立貝形古墳	長65	二段?		7
23	赤井高塚第2号	赤井町	孤立貝形古墳	長15	?		18
24	浄業寺第1号	高杉町	孤立貝形古墳	長27.9	二段	箱式石棺	1, 23
25	浄業寺第12号（旧第1号）	高杉町	円墳	径45.8	二段	粘土層2基	1, 23
26	浄業寺第17号（旧第2号）	高杉町	円墳	径29.5	二段	箱式石棺	1, 23
27	浄業寺第61号（旧第3号）	高杉町	方墳	辺14.2×13.7	?	箱式石棺	1, 23
28	稲荷山口-2号	三良坂町	円墳	辺10	墳丘裾の東半分（低い側）のみ	土坑	12
29	三玉大塚（第1号）	古香町	孤立貝形古墳	長41	三段	髷穴式石室	13

※発掘調査は行われていないが，墓石が確認されている主要な古墳。

第8表 三次市内の埴輪出土の古墳

No	古墳名	所在地	墳形	規模 (m)	埋葬施設	埴輪種類	出土位置	文献
1	上川立七ヶ塚第1号	上川立町	前方後円墳	直径33	竪穴式石室?	円筒 (須賀貫)	表扉	27, 34
2	関日南第1号	青河町	前方後円墳	直径37	竪穴式石室	円筒	墳丘	2, 28, 34, 36
3	関日南第2号	青河町	前方後円墳	直径16.95	竪穴式石室	円筒		2
4	久々原第6号	西酒屋町	竪立貝形	直径16.5	竪穴式石室2基	円筒・馬		6
5	酒屋基塚	西酒屋町	竪立貝形	直径(46)	竪穴式石室2基	円筒	墳丘	14
6	若菜第7号	西酒屋町	円墳	直径13	土坑?	円筒・朝鮮・家	墳丘	本報告書
7	大塚第6号	西酒屋町	円墳	直径8.7	竪穴式石室, 土坑(木棺)	円筒・朝鮮	南溝内・第1土庫部	16
8	大塚第7号	西酒屋町	円墳	直径8.5		円筒	南溝内	16
9	大塚第8号?	西酒屋町	円墳	直径8.7	土坑?	円筒(2片)	南溝内	16
10	緑岩	南塚町	円墳	直径19.5	竪穴式石室2基	円筒・朝鮮・人物・馬	南溝内	11
11	浄栄寺第12号(旧第1号)	高杉町	円墳	直径45.8	粘土棺2基	円筒・家	墳丘	1, 23
12	浄栄寺第25号	江田川之内町	円墳	直径25		円筒・形象?		3
13	浄栄寺第37号(旧第2号)	高杉町	円墳	直径29.5	粘土棺	朝鮮		35
14	七ヶ塚第9号	小田幸町	前方後円墳	直径29.5		円筒		23
15	七ヶ塚第11号	小田幸町	竪立貝形	直径28.5		円筒		35
16	糸井大塚	糸井町	竪立貝形	直径65		円筒・家	墳丘	7, 18
17	(太郎九池)	轟敷町				円筒		3
18	四谷貫小塚第17号	四谷貫町	円墳	直径14.3		円筒・形象	南溝内	10
19	上大塚	向江田町	前方中円形	直径26	竪穴式石室?	円筒・朝鮮	南溝内	19
20	野船溝第9号	向江田町	円墳	直径6.5×7		円筒	南溝内	24
21	藤山第1号?	向江田町	前方後円墳		竪穴式石室	円筒		10
22	藤山第2号?	向江田町	前方後円墳			円筒	墳丘	10
23	宮の本第24号	向江田町	円墳		竪穴式石室, 竪穴式石室2基	円筒・朝鮮		29
24	岡田山第3号	三良坂町	円墳	直径11.7×11	土坑(木棺)	円筒・形象(家)	南溝内	15
25	海田原第4号	若舎町	竪立貝形	直径36		円筒		33
26	三玉大塚(第1号)	若舎町	竪立貝形	直径41	竪穴式石室	円筒・朝鮮・家・人物・馬・鹿		13
27	三玉第4号	若舎町	竪立貝形			円筒(須賀貫)		17
28	西の神(才の神遺跡)	三和町	円墳?			円筒	墳丘周辺	4

次の文献の一覧表等を参考にして作成。

(1) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター「第3表 広島県埴輪出土地名表」『下山遺跡群発掘調査報告』昭和55年

(2) 小森由佳利・藤井寛大・藤井裕平「後期埴輪集【広島県】」『中国四国前方後円墳研究会第15回研究集会 後期埴輪の特質とその地域的展開【発表要旨集・後期古墳出土埴輪集】』(中国四国前方後円墳研究会第15回研究集会(学教大会)実行委員会)2012年

手島智幸「山陽西部における後期円筒埴輪の探検」『中国四国前方後円墳研究会第15回研究集会 後期埴輪の特質とその地域的展開【発表要旨集・後期古墳出土埴輪集】』(中国四国前方後円墳研究会第15回研究集会(学教大会)実行委員会)2012年

第9表 三次市内の馬具出土の古墳

No	古墳名	所在地	墳形	規模	埋葬施設	出土馬具	備考	文献
1	四谷貫小塚第16号	四谷貫町	方墳	直径11×9	竪穴式石室	鞍具, 鞍金, 三角櫛形香燈の字形金具		32
2	若舎第8号	西酒屋町	円墳	直径12	第1: 竪穴式石室 第2: 土坑(木棺)	辻金具, 轡(牽籠櫛板・引手・直線櫛板)		本報告書
3	札幌	藤山町	円墳	直径8~9	竪穴式石室	押式鉄製品(櫛?)		37
4	宮の本第20号	向江田町	円墳	直径14.1×13.5	竪穴式石室	轡(牽籠櫛板・引手)		29
5	青免第10号(草塚)	大田幸町	円墳	直径10	竪穴式石室	鞍具(牽籠形)	線跡	7
6	上川立七ヶ塚第3号	上川立町	円墳?	直径11×18.5	竪穴式石室	轡(牽籠櫛板・引手), 辻金具		38
7	田戸南第2号	三良坂町	円墳	直径10	竪穴式石室	轡(引手)		26
8	三玉大塚(第1号)	若舎町	竪立貝形古墳	直径41	竪穴式石室	鞍金具(鞍), 轡金具(轡)		13
9	宮蔵	三和町	円墳			轡(牽籠櫛板・引手)		4

【第7～9巻にかかる文献】

- 1 松崎寿和・湖尾浩『広島県三次市杉並寺遺跡群調査報告』『広島大学文学部紀要』第6号 1954年
- 2 広島県三次郡三次市史編纂委員会編『広島県三次郡三次市史料続纂』第1集（広島県三次郡三次市史行会）昭和31年
- 3 本村要泰『備後三次市太郎古墳調査報告』『古代学』第4集（古代学研究会）1961年
- 4 三和町誌編纂委員会『三和町誌』（広島県三次郡三和町役場史誌編纂委員会）昭和43年
- 5 湖尾浩編『四拾貫小墳』（四拾貫小墳発掘調査報告）1969年
- 6 広島県教育委員会管理課文化課『第2回広島県埋蔵文化財展（資料）』（期間：昭和51年6月22日～6月26日）
- 7 広島県三次郡三次市史料編纂委員会編『広島県三次郡三次市史料続纂』第5集（広島県三次郡三次市史料編纂行会）昭和49年
- 8 広島県教育委員会『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（1）1978（昭和53）年
- 9 広島県教育委員会『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（2）1979（昭和54）年
- 10 広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター『下山遺跡群発掘調査報告』昭和55年
- 11 広島県教育委員会『緑ヶ丘墳～三次郡工業団地第2期造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査～』1983年
- 12 三員坂町教育委員会『稲荷山D～2号古墳～土地改良総合整備事業に伴う発掘調査～』1983年
- 13 広島県三次郡吉舎町教育委員会『三玉大塚～調査と整備～』1983年
- 14 広島県教育委員会『高屋基塚古墳』昭和58年
- 15（財）広島県埋蔵文化財調査センター『岡山山第3号古墳発掘調査報告』昭和59（1984）年
- 16 広島県埋蔵文化財調査会『大塚遺跡』1985年
- 17 和田裕典『高屋地方における遺跡調査（1）～古墳時代を中心として～』『高屋古墳文化論考』（高屋友の会）1985年
- 18 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『赤井高塚第2号古墳・赤井ノ本第2号古墳』昭和63（1988）年
- 19 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『上大岡古墳・下の遺跡群』平成元（1989）年
- 20 森田俊明『備後』『前方後円墳展（中国・四国編）』（山川出版）1991年
- 21 古瀬清英『久々原古墳群』『原色・広島古墳』（高屋友の会）1991年
- 22 三次市教育委員会『下山寺第4・5号古墳～三次市水道事業（第二期拡張事業）に伴う埋蔵文化財の発掘調査～』1994年
- 23 榎田千佳穂『史跡浄栄寺・七ツ塚古墳群測量調査報告』『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第4集 平成15（2003）年
- 24 三次市教育委員会『野瀬南第8～11号古墳』2004年
- 25 財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（13） 瀬戸越塚古墳』（財団法人広島県教育事業団）平成23（2011）年
- 26 三員坂町教育委員会『灰塚ダム水没地区遺跡群～田戸北古墳群・田戸南古墳群・田戸古墳・福山城跡～』2004年
- 27 加藤光昭『三次盆地の前方後円墳 上川立七ツ塚第1号・第2号古墳～調査報告～』『みよし地方誌』第86号（三次地方研究会）2011年
- 28 加藤光昭『三次盆地の前方後円墳 2 実地第1号古墳・実地南古墳、明光山第5号古墳～調査報告～』『みよし地方誌』第89号（三次地方研究会）2012年
- 29 財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（29） 宮の本第20～26・31・32号古墳』（財団法人広島県教育事業団）平成25（2013）年
- 30 財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（33） 福山第3～6号古墳』（財団法人広島県教育事業団）平成26（2014）年
- 31 村田眞・赤木智恵・上村登月・川添敦史・戸川貴大・中田南美・林美和・三輪聡史・山本晃弘『三次市吉舎町海田第20号墳の測量調査』『広島大学大学院文学研究科史学専攻発掘調査室年報X XⅧ、考古学研究室紀要第6号』2014年
- 32 三次市教育委員会・特定非営利活動法人広島文化財センター『四拾貫小塚第16号古墳・下山山遺跡群発掘調査報告書』（三次市教育委員会）平成29（2017）年
- 33 村田眞『三次市吉舎町海田第20号墳の採集遺物』『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要第9号』2017年
- 34 加藤光昭『三次盆地の前方後円墳21 前方後円墳土上の埴輪～上川立七ツ塚第1号古墳・実地第1号古墳出土例～』『みよし地方誌』第115号（三次地方研究会）2021年
- 35 三員坂町・村田眞『史跡浄栄寺・七ツ塚古墳群の採集資料～浄栄寺第37号古墳と七ツ塚第11・49号古墳～』『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第9集 令和3年
- 36 村田眞『三次市青河町稲日古墳群の円筒埴輪』『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第9集 令和3年
- 37 財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（7） 乳塚古墳・大平遺跡・後山大平古墳』（財団法人広島県教育事業団）平成21（2009）年
- 38 三次市教育委員会

图 版



1. 第7号古墳全景
(北から)



2. 第7号古墳全景
(東から)



3. 第7号古墳検出
状況 (東から)

1. 第7号古墳東側
土層 (東から)



2. 第7号古墳西側
土層 (東から)



3. 第7号古墳西側
土層 (西から)





1. 第7号古墳主体部



2. 第7号古墳完掘
状況（東から）



3. 第7号古墳完掘
状況（北から）

1. 第8号古墳全景
(北から)



2. 第8号古墳全景
(南から)



3. 第8号古墳 礎・
鉄鋤鍬先出土状況
(西から)





1. 第8号古墳南側
土層 (西から)



2. 第8号古墳西側
土層 (南から)



3. 第8号古墳 第1
主体部検出状況
(北から)

1. 第8号古墳 第1
主体部検出状況
(西から)



2. 第8号古墳 第1
主体部検出状況
(北から)



3. 第8号古墳 第2
主体部検出状況
(北から)





1. 第8号古墳 第2
主体部検出状況
(北から)



2. 第8号古墳
第1・第2主体部
検出状況
(東から)



3. 第8号古墳
第1主体部
鉄器出土状況
(北から)

1. 第8号古墳第2
主体部鉄器出土
状況（南から）



2. 第8号古墳 第1
・第2主体部
完掘状況
（東から）



3. 寄貞古墳群現況
（南から）





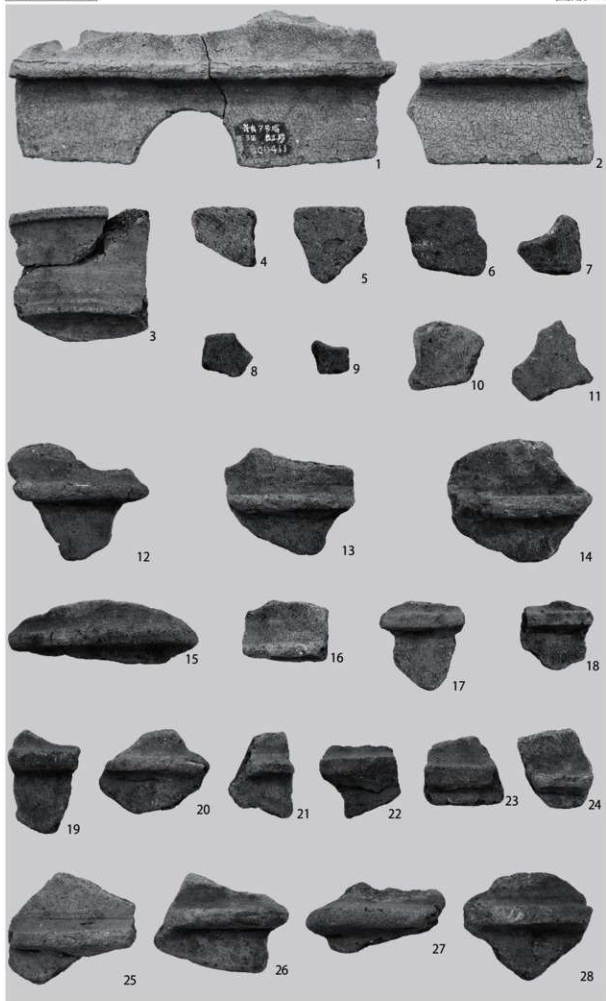
1. 寄貞城跡現況
遠景（東から）



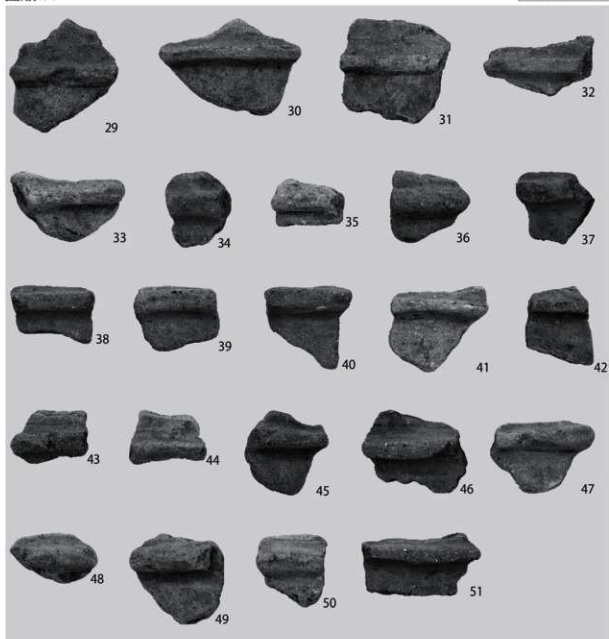
2. 寄貞城跡現況
土塁（北から）



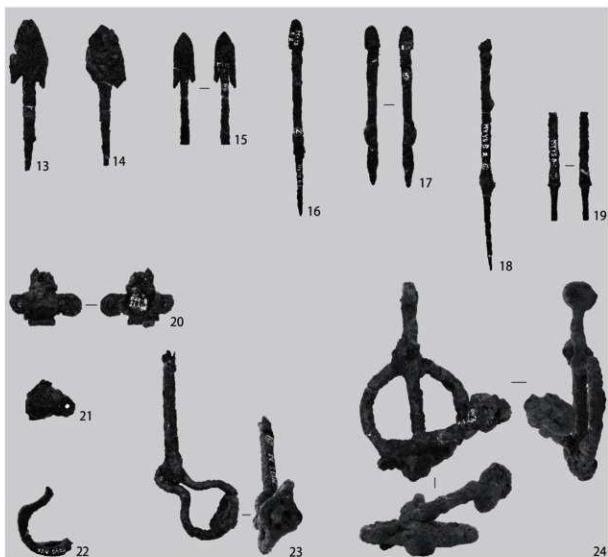
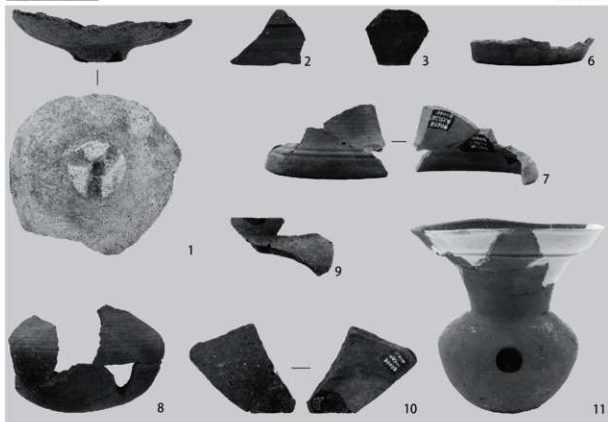
3. 寄貞城跡現況
土塁（南から）



第7号古墳 出土遺物1



第7号古墳 出土遺物2



第8号古墳 出土遺物1



第8号古墳 出土遺物2

報告書抄録

ふりがな	よりさだいななごう・はちごうこふんはつかつちようさほうこくしよ							
書名	寄貞第7・8号古墳発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	広島県三次市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第16集							
編著者名	中村 芳昭・友廣 美和・桑原 隆博（三次市教育委員会） 重森 正樹（特定非営利活動法人広島文化財センター）							
編集機関	三次市教育委員会 特定非営利活動法人広島文化財センター							
所在地	〒728-8501 広島県三次市十日市中二丁目8番1号 〒732-0052 広島県広島市東区光町二丁目9番22 丸子ビル601号							
発行年月日	2023年3月24日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
寄貞第7号古墳	三次市西酒屋町	3420920		34度	132度	19800407	約600㎡	広域営農 団地農道 整備事業
寄貞第8号古墳	大久保564-5番地他			47分	51分	?		
寄貞城跡				38秒	11秒	19800426		
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
寄貞第7号古墳	古墳	古墳		円墳、葺石、土坑		埴輪（円筒・朝顔・家形）		葺石、埴輪
寄貞第8号古墳	古墳	古墳		円墳、堅穴式石室・土坑		土師器、須恵器、鉄製品（鐵・馬具・農工具）		馬具
寄貞城跡	城跡	中世						
要 訳	古墳は後期前葉の時期で、2基とも直径12～13mの小型の円墳である。第7号古墳は、葺石が廻り、埴輪が出土している。第8号古墳は小型の堅穴式石室と木棺を納めて周囲に礫を配した土坑の埋葬施設2基であり、鉄製の馬具類・武器類・農工具類が出土している。特に馬具は古式のものである。							
資料保管先	広島県三次市教育委員会							

広島県三次市文化財調査報告書 第16集

寄貞第7・8号古墳発掘調査報告書

発行日 令和5（2023）年3月24日

編集 三次市教育委員会

〒728-8501 広島県三次市十日市中二丁目8番1号

特定非営利活動法人広島文化財センター

〒732-0052 広島県広島市東区光町二丁目9番22 丸子ビル601号

発行 三次市教育委員会

印刷 株式会社ユニバーサルポスト

